

4月 26 日の授業への質問・回答

・「地下に掘られた建物」をはじめてみました。あれらは世界遺産なのでしょうか。何年かけて作られたのか、あんなにすごいものを建てようとするにまでさせるその教えや指導者がどんな人だったのかなど、驚きとともに、その神秘性を感じました。先生はやはり何度もスライドの写真の実地を研究に行かれるのですか？私も見に行きたいと思いました。

・地下に掘り下げられて造られた建物が印象的でした。なぜ、地下に作ったのかと疑問に思い、少し考えた意見を書きます。現在の建築と言えば、積み上げて上方に大きくしていくものですが、その常識にとらわれなければ、重力に逆らわず、下に建物を取っていくという考え方も不自然ではなかったのかなと、勝手に納得しました。直接、仏教に関係ない疑問ですが、とても気になりました。

はじめに写真をお見せしたグジャラート州バターンにある階段井戸の建築物から、強い印象を受けたというかたが、たくさんいました。そのうちのふたつを紹介しました。私もあの遺跡に行ったときはおどろきました。建物というのは上に伸びるものだと思っていたのですが、それを逆にしたような構造なのです。壁一面の彫刻にも圧倒されました。ほんとうに、どういう発想で、どのような人たちが作ったのでしょうか。コメント二人目の方の指摘もおもしろいですね。「建築とは重力との戦いだ」ということを聞いたことがあります、地下に掘れば、戦う必要があまり無いわけです。インドには岩山を掘って作られた僧院や寺院がありますが、それも同じ発想です。有名なものではエローラ石窟のカイラーサ寺院で、巨大な岩山を掘り下げながら、寺院を造り出しています（掘り残すことで、巨大なビルのような寺院ができあがっています）。エローラ石窟は世界遺産に指定されていますが、バターンの階段井戸は指定されていません。インドにはほかにもびっくりするような建物や遺跡がたくさんあります。タージマハールだけがインドではありません。そのうちのいくつかは HP で紹介していますが、ぜひ、皆さんも現地に出かけて、直接、見てください。私も1年に1、2回は調査に出かけています。

個人的に思ったんですけど、古い時代の遺跡とかを復元するのって、へんじゃないんですかね？古いものはそのまま残すべきというか、復元しちゃったら面白みがない気がしました。

そのとおりです。それなのに、インドの遺跡ではしばしば「復元」がなされています。しかも、あまり学問的ではないことが多く、発掘の指導者の趣味や好みで、新しい建物のようなものができあがっています。日本の考古学では考えられないのですが、それもお国柄なのでしょう。仏像などの修復もかなりずさんです。

先生の HP の五体の仏像を見て、同じインドの仏像でも、作られた地方によって、形や雰囲気が違うことにおどろくとともに、どうして違うのかが疑問に思いました。仏像を作る人の仏に対するイメージの違いが出るのであれば、仏像を作る人の数だけの仏像があることになります。そうすると、同じ仏像はひとつもないことになり、仏がたくさんいるようになると思います。私はインドの宗教だけでなく、シャカや仏についてもまったくと言っていいほど何も知りません。だからシャカが仏なのか、それとも神様のような存在なのか、どちらなのでしょうか。また、仏と神様の違いは何なのでしょうか。

HP の五体の仏像はインド、日本、中国のものが混じっています。詳しく紹介しておくと、向かって左から、マヒシャースラマルディニー（グジャラート州バターンの階段井戸）、金剛手菩薩坐像（オリッサ州ウダヤギリ遺跡）、観音菩薩立像（愛知・瀧山寺、快慶作）、帝釈天立像（同前）、ターラー立像（北京首都

博物館所蔵、中国、明代）。同じ仏でも地域や時代によって、形が雰囲気が違うということは、この授業の重要なテーマになります。もう一方で、同じ仏が、地域や時代を超えて、同じような姿をしていることもあります。仏像を作るときには、ルールのようなものがありますが、それをどの程度守るかも重要なポイントです。厳格に守りすぎると、同じ作品のコピーばかりできてしましますし、まったくそれを守らなければ、たしかに「仏像を作る人の数だけの仏像」ができてしまいます。シャカがどのような存在であるかも、授業をおして少しずつ学んでください。仏教に詳しい人は、受講している皆さんの中にはほとんどいないと思います（ひょっとするといふかもしれません）。基礎知識の有無は気にしないでください。仏と神の違いは、どのような立場を取るかで異なります。

「空海はまだ生きている」正直、ウソだーっておもいました。たしかに生きている「ことになっている」ってわけみたいですが、生きていることになっていること自体がびっくりです。これもある意味「解脱」なんでしょうか。不死ならば輪廻することもないですし。

空海の場合、「入定」（にゅうじょう）といいます。「禪定に入る」の略で、深い瞑想の境地を禪定といいます。弘法大師の入定信仰は平安時代の中頃から流行し、大師信仰をかたちづくります。現在でも、大師信仰は四国遍路や高野山信仰と結びついで、強固に生き続けています。弘法大師が「生きている」あるいは「入定している」かどうかは、だれにもわかりません。しかし、そのような信仰があることは事実ですし、われわれはそこから出発して、なぜそのような信仰が生まれたのか、それは歴史的に、あるいは日本の文化としてどのような意味があるのか、などを考えることができます。人文科学は人間に対する学問ですから、自然科学的に（あるいは合理的に）生きているか死んでいるかは問題にする必要がありません。理科系の人には我慢できないかもしれません。

仏とつながっているのは僧で、仏の具現化をするのは仏師なら、像のイメージはだれの頭の中で考えられたものなのか気になる。

いろいろな人の頭の中にあったのでしょうか。頭の中にあったものを実際に形にする過程で、そのイメージも変わっていきます。イメージを生み出す人もいれば、そのイメージの影響を受けて、別のイメージを生み出す人もいます。特定のイメージが、特定の文化に属する人々の間で共有されることもあります。イメージをめぐる考察は、おもしろいですよ。なお、密教美術の場合、僧と仏師（あるいは仏画師）が同じ場合もあります。有名な鳥獸戲画の鳥羽僧正も密教僧と言われています（実際は、鳥羽僧正そのものがだれであるかは、よくわかつていません）。

地球が誕生してから 46 億年くらいたっています。太陽の燃焼可能時間の関係で、あと 50 億年ほどで死滅すると言われているはずなのですが、弥勒が 56 億 7 千万年后に衆生を救うという話を聞いたとき、その衆生はどこにいるのだろうと思いました。こういう天文のことがわかっていたとしたらおもしろいです。地球が誕生してからの時間については、ほかにも指摘してくれたかたがいました。どうもありがとうございます。56 億 7 千万年の場合は、誕生から現在よりも長いですが、インドの伝承の 5 億 7 千 6 百万年の場合は、それほどではないですね。弥勒の出現と衆生の救済は、仏教の宇宙論と深く関わっています。仏教というと、迷信や葬式のようなイメージが強いのですが、天文を含め宇宙全体を問題にする壮大な宗教です。弥勒信仰については授業ではあまり取り上げられませんが、仏教の宇宙論は重要なテーマとなります。お楽しみに。

弥勒菩薩がシャカの次の仏であることはまったく知らなかった。「次の仏は弥勒菩薩だ」と言ったのはだ

れなのか気になる。高校の日本史でも少し習ったが、それぞれの文化や時期によって仏様の表情や姿が違うというのが、多くの写真を見てよくわかった。まったく知識もないのに、こんなことを言っていいのかわからないが、私は仏様はほんとうはないと思っている。救いを求める人々が作り上げたものだと思う。だから、姿形が場所や時期によって異なっているんじゃないかな。

弥勒を次の仏に指定したのは、お釈迦さんです。仏教のきまりで、今の仏が次の仏がだれであるか指定します。シャカを指定したのは燃燈仏（ねんとうぶつ）という仏です。ちょうど、国王が王位継承者を決めるようなものです。弥勒については昨年、学部の「仏教文化論」で取り上げました。関心があるかたは、HP の授業「平成 18 年度 仏教文化論」のページを参照してください。仏のイメージがさまざまあることは、このあとの授業を通じて、じっくり見ていくことになります。「仏様がほんとうはない」かどうかは、すでに書いた「弘法大師が生きているかどうか」と同じことで、立場や人によって違います。しかし、それを信じた人たちがいたからこそ、仏教が信仰され、仏像が作られました。仏教研究はそれを研究対象にします。なお、仏教では「仏さえも存在しない」という考え方もあります。「空」（くう）の思想です。もちろん、その場合、われわれも、地球も、宇宙も存在しません。この世に存在するものは何もないのです。この世そのものも存在しません。信仰対象や信仰する人々も存在しないということを説く宗教なのです。おもしろいと思いませんか？

授業の中でヒンドゥーの寺院を見せてもらったけれど、ヒンドゥーのインドラ神？かアスラ？などが、仏教の中で見られるのがたいへん不思議に思った。そもそも、自分の知っている限りの仏教の話では、ヒンドゥーの神々は当然として、～明王とか、守護神的な存在が、どうやって教えの中に登場し、仏像に負けないくらい像が作られることになったのか、知りたく思った。

ヒンドゥー教やインドの宗教について、よく知識をお持ちのようです。ヒンドゥー教の神が仏教、とくに密教にどのように取り入れられたかは、いろいろは本がありますので、この授業ではありません。教科書の『インド密教の仏たち』の中でも、随所で紹介しています。それよりも、ヒンドゥー教の神を視野に入れると、密教の仏の世界がどのように違って見えるかを、最後の方で考えたいと思います。

小さいころ、浄土真宗のお寺に通っていて、「死んだら、みんな仏様になる」と教わったが、トリヴィアの仏教で、「シャカの次の仏が現れるに必要な時間は、地球が誕生してから現在までよりも長い」ということを知った。今までずっと、仏様は自分のご先祖様たちだと思って、仏壇にお参りしていたので、ショックを受けた。このふたつの話がほんとうだとしたら、今までシャカ以外で仏になった人はまだいないということなのか。もしそうなら、今までなくなった人たちは、今どうしているのか。

それは私もわかりません。あなたが「仏様は自分のご先祖様たちだと思って」お参りしていらっしゃったのなら、多分そうなのでしょう。どうか、私の授業ごときでショックは受けないでください。最近は「千の風」になっているという説も有力です。なお、仏教が問題にしている時間は、「地球が誕生してから」というようなちっぽけなものではありません。宇宙ができてから、あるいはそれ以前とか、宇宙が消滅してからの時間も相手にします。

密教や仏と聞くと、どこかうさんくさい、気味が悪いというイメージがあったが、今日、多様性のある仏像を見て、だれが、どういう意図で制作したのか、何を伝えたいのかを知りたくなった。

仏像を「だれがどういう意図で制作したのか、何を伝えたいのか」を知ることこそ、この授業の中心テーマです。現在の日本では、宗教はたしかに「うさんくさい」とか「気味が悪い」さらには「危険だ」と考えられることが多いようです。開き直るわけではありませんが、「うさんくさくて、危険である」からこ

そ、宗教はおもしろいのです。合理的で、安全無害な宗教なんて、この世に存在しません。ついでに言えば、宗教の危険性を知らない人が、「うさんくさい」宗教にあっさりだまされるのです。オームはその典型です。

私のインドに対するイメージは、言語が多いということです。千手観音も密教の仏なんですか。マンダラの中央にいるのは一番偉い仏なんですか。シャカはマンダラの中にはいないんですか。

たしかに、多言語の国家というのはインドの重要な特徴ですね。しっかりしたインドのイメージです。千手観音は、意外に思われるかもしれません、密教の仏です。ただし、授業で取り上げる密教とは少し異なり、その初期の段階のものです。日本では奈良時代に伝わった密教で、古密教と呼ばれることもあります。密教の仏には、それぞれ、その仏の教えや儀礼を説く文献がありますが、千手観音や十一面観音に関する文献は、初期の密教経典に分類されます。マンダラの中央にいるのは一番偉い仏ですが、単に他の仏よりも位が高いというだけではありません。これについてはマンダラの時に説明します。シャカはマンダラに含まれることもあります。胎蔵曼荼羅では釈迦院というところにいます。しかし、ほとんどのマンダラにはシャカは含まれません。シャカのかわりの仏が重要な位置を占めるようになるからです。

シャカに水かきがあるのは、高二の夏にオープンキャンパスで金大に来て、スライドを見たときに、聞いた覚えがあります。

それはすばらしい。そのときに文学部でスライドショーをしていたのが、私の所属する比較文化コースで、スライドは私が作ったものです。スライドショーの近くで、高校生と話をしたり、本を見せたりしていました。直接お話ししているかもしれません。スライドショーの内容を覚えていてくれて、感動的ですね。

5月10日の授業への質問・回答

仏像が仏の姿を人間として描くに至った経緯はよくわかりました。ただ、仏の三十二相のように、人間の姿で描くことを認めながらも、ことこまかに姿を制限することで、形式主義的な傾向を残しているのではないかと考えたのですが。いかがでしょうか。

まさにそのとおりです。授業では「仏の象徴的表現」と「仏像の出現」を強調したのですが、その両者をつなぐ「形式主義としての三十二相」にふれるのを、うっかり忘れてしまいました。わざわざ「仏の三十二相」を読んでいただいたのは、そのためだったのですが・・・。三十二相というのは、人間の姿をとりながら、人間にはない「超人的」な特徴です。ありえない姿を与えることで、人間の姿に近い形で表すことを可能にしたのでしょう。もうひとつ、三十二相の重要な点は、この特徴をそなえているのが、仏と王のみであるという説明が、仏典にしばしば現れることです。この場合の王とは、理想的な帝王で「転輪聖王」（てんりんじょうおう）といいますが、授業で紹介した、「王か仏か」という選択肢の時にも必ず登場する名称です。具体的なイメージとして、三十二相が仏と王とをつないでいます。なお、三十二相は仏像の誕生にも重要な役割を果たしたのですが、仏を瞑想する「観仏」という実践とも関連します。すでに、仏がこの世にいない時代には、仏像を作るだけではなく、その姿をありありと思い浮かべ、あたかもそこに出現したかのように瞑想することも行われたようです。この伝統は、中央アジアや中国を経由して、日本にも伝わっています。

インドの美術作品もそうだが、日本の仏像などを見ると、私と同じ人間の手で作られたものだということが信じられないときがある。単に技術ではなくて、想像を絶する世界観とか、本当に見てきたように作られていることに驚く。まったく信仰心がない私が見ても、何か不思議な力を感じてしまうような作品を作った人々は、何を考え、どのような環境で生きていたのか、非常に興味がある。

私の関心もそのあたりにあります。仏像そのものも興味深いのですが、それを生み出した人々の心や考え方を知りたいと思います。それは同時に、時間を超えて、同じ人間であることを実感することでもあります。そのためには、別に信仰心の有無は問題ないはずです。「想像を絶する世界観」は、この先の「仏教の世界観」のところで詳しく見るつもりですので、お楽しみに。

仏は宗教世界の王であり、釈迦は王と同等という説明を聞き、前々からあった疑問が解けたように思える。私はシャカは生まれた直後に「天上天下唯我独尊」といったという話を昔聞いたけれど、世俗の欲を捨てて仏となるはずの釈迦にはそぐわない大きな欲を表したことばだと感じ、どうしてそんなことを言ったのか疑問に思っていた。しかし、釈迦が宗教世界の王になることを考えれば、納得のいくことばだと思えた。王と仏の関係は、仏教をとらえる上で重要です。授業ではおもにイメージの世界での両者のつながりを取り上げましたが、それだけではなく、王権やイデオロギーの問題とも結びつきます。学期の終わりの方では、王の即位儀礼と密教の儀礼の関係を取り上げます。日本では、鎮護国家の儀礼において、密教が重要な役割を果たしますが、そのときにも王と仏は密接な関係を持ちます。日本史では「王法と仏法」という概念が重要なものです。宗教と政治が結びつくのは、イスラム教やキリスト教を連想することが多く、あまり仏教は関係ないと考えるかもしれませんのが、何千年も生き続け、アジア全域に広まった仏教が、政治と無関係に存在することなどありえないのです。

初期の仏教美術によって、人の形をした仏が生み出され、その後はそのスタイルが基本となっていますよね。そうすると、昔も今も人々が必死に信仰している仏というのは、人の心に生まれた俗世間的なものに過ぎないのではないかですか。あと、普通の木や銅のかたまりを心のよりどころとする人間というものは、何か眼に見えるものに頼ってしまう性質を持っているものなのかなあと思った。だから、鎖国時代も「踏み絵」が有効な手段として用いられたんだなあ。

「人の形をした仏」というのは、仏教、とくに日本の仏像を見慣れているものには自然な感じかもしれません、宗教美術としてはけっして「あたりまえ」のものではありません。授業で紹介したイスラム教や、ユダヤ教も神の像を造りませんでしたし、キリスト教も初期にはやはり、人の形でイエスを表すことはありませんでした（これら三つの宗教は、歴史的にもきわめて近い存在です）。日本の神道でも、神社に人の形をした神様の像はありません。世界中の宗教を見回しても、人間の姿で神や超越的な存在を表す宗教はありません。授業でも強調したように、神や仏のような特別な存在、神々しく、この世にはありえない存在を、われわれと同じ姿で表すことの方が、異常なことと見ることもできます。そういう意味で、「あらゆる宗教は偶像崇拜を禁止したかったはずだ」と言ったのです。「われわれの姿と同じではない」ことを強調する手段として、人間離れしたイメージを与えるという方法があります。三十二相もそのような例と見ることができますし、先週の密教仏のスライドで何例かお見せした多面多臂（多くの顔や腕）をそなえた仏も、同様です。シンボルで表すのとは別の方法で、特別なイメージであることを表現しています。

はじめて、仏教は偶像崇拜が禁止されていると知って驚いた。それにしても、あまりに多くの仏像が作られすぎているし、家に仏壇があり、それにお参りするのはどういうことなのかと思った。でも、その答えには、何かを信仰するものの、それを大切にする気持ちから、ある一定のものをそばに置いておくという、複雑で矛盾した思いがあったということを知って、何となく納得した。気持ちはわかるけど、「仏の三十二相」はいろんなものを求めすぎだと思う。

私の説明不足ですが、仏教は偶像崇拜を禁止しているわけではありません。イスラム教がそれを厳格にテキスト（コーラン）の中で規定しているのに対し、仏教はそのような文献をもっていません。僧侶や在家信者の生活を規定した律（りつ）という文献にも、仏像を作ってはいけないとは、どこにも書いていません。それにもかかわらず、初期の仏教徒が仏像を作らなかったのは、「タブーだったから」とよく紹介されています。もちろん、それでも正しいのですが、「タブーだったから」という理由で片づけてしまうと、そこから思考が進みませんし、当時の人々の心を理解することも不可能です。宗教とは、コメントでも指摘してくれているように、「複雑で矛盾した思い」のかたまりです。それは、われわれ現代人でも同じであることに、気付いてほしいと思って、詳しく説明したのです。

なぜ、仏を法輪や菩提樹の形で表すのかということだが、現在の私たちが抱く感情に似たものを、当時の仏師たちももっていたのだろうか。それにしても、インドラやヴィシュヌ、カーリーといった仏以外の「神」は、同じように、象徴的に表されなかったのか。何らかの形で、仏と関わっている以上は、それらの神々も信仰の対象になるはずだが。

当時の仏教美術を生み出したのは、直接は仏師に当たるような職人だったでしょうが、そのテーマに何を選ぶか、それをどのように表現するかは、制作を依頼した人、具体的には僧侶や在家の信者（おそらく裕福な信者）たちもかかわっています。そのような人たちも含め、当時の仏教徒もわれわれと同じような感情を持っていたのではないかということを、授業では強調しました。しかし、その一方で、あまり自分に引き寄せて理解をしきぎると、そのような異文化を正しく理解できないこともあります。歴史的な状況に

十分配慮して、その独自性を理解しつつ、われわれと共に通する普遍的な文化のあり方を見たいと思っています。なお、インドラやヴィシュヌなどのインドの神々、とくにヒンドゥー教の神々は、仏教美術よりも少し遅れて、造形化がはじまったようです。意外に思うかもしれません、ヒンドゥー教では仏教以上に、神の姿を現すことに抵抗がありました。仏教よりも古い時代の宗教である、いわゆるバラモン教（この名称は専門家はありません）では、神々の像はまったく存在しません。

仏像は、インド発生のものだと、それは違いないかもですが、外来文化を授業したために発生したというのは新鮮でした。それにしてもヤクシャ（夜叉）などにしても、インド→中国→日本と旅をするうちに変化し、強調されたり、切り取られたりしていくキャラクターもしくは個性の変遷には興味がわきます。その源流はもちろんインドからでしょうが、インドの中でもそうして時代ごとに変化していく部分はあったのですね。

ヤクシャの作品をいくつか紹介しましたが、仏教美術といえば、仏像しか思い浮かばないのでないかと思い、その多様性を知ってもらいたかったからです。ストゥーパの時にも、このような仏教の周縁のイメージをいくつか取り上げるつもりです。蓮の花やマカラ、象、龍などです。このようなイメージが地域や時代を超えて、連綿と受け継がれ、その中で変容していくことに、私も強い興味を覚えます。

寺で仏像を見ていつも思うのだけど、どうして、作られた当時の状態に、たとえば、金色を塗るなどしないんだろう。当時の人たちは、金色の仏を見て、オオーとか思ったのに違いないのに。

中国やチベット、あるいは東南アジアでは、実際にそのように修復します。しかし、多くの日本人、とくに現代の日本人には、そのような金ぴかの仏は、たいてい、ありがたく思えません。日本人にとっての仏像、あるいは「聖なるもの」のイメージには、どこかくすんだ、古色蒼然としたものが好まれるのです。仏の三十二相には「金色相」といって、全身が金色に輝いているという特徴があるのですから、金ぴかに塗るのが「正しい仏のイメージ」なのですが、それを忠実に再現することが、かならずしも「望ましい仏のイメージ」ではないのでしょうか。「ありのままに表現すること」の限界が、ここにあるのかもしれません。

世界史でサンダーのストゥーパをならったときにストゥーパは日本語で「そとば」の語源になったと聞きました。実際は仏塔なのに、なんだか変だと思いました。また、インド美術における仏像は、カニシカ王によって大いに広がったと知り、なんだか新鮮な感じです。

ストゥーパが「卒塔婆」になったのはそのとおりです。ストゥーパという発音を漢字に置き換えたのが卒塔婆です。でも卒塔婆とストゥーパは形が全然、違いますね。卒塔婆は長細い板や角柱のイメージですが、よく見ると、その上の部分はでこぼこが作ってあります。これは五輪塔を模したもので、地水火風空という五輪（五つの元素）を表しています。実際は立方体や球、宝珠形などの石を積み上げて、五輪塔を作るのですが、それを木で代用したものです。五輪塔の五つの元素は、世界を構成する元素で、五輪塔全体が世界を表しているのです。五輪塔の形をした仏塔はインドにはありませんが、世界を表すという点ではストゥーパも同様です。これについては、仏塔の時にお話しします。仏像がカニシカ王によって広められたかは定かではありませんが、カニシカ王の時代に仏像が誕生したことは、授業で紹介した作品などで確認できます。

釈迦のお墓は世界にたくさんある。骨が納められているという場所もいっぱいあるが、骨をそんなに分けることは不可能である。それにもかかわらず、そういう施設があるのは、お釈迦様の存在は神性で、信仰

の対象となっていて、人々の心の支えとなっていたんだと思う。

釈迦のお墓がストゥーパや仏塔で、日本でも舍利塔という形で、大小さまざまなものがあります。仏教を信仰するところには、必ず仏の骨である舍利をまつたこのような施設があるのはそのとおりです。その背景には釈迦に対する信仰があるのはもちろんですが、それだけではありません。無数にある舍利と、それをまつるストゥーパ（舍利塔）は、仏教とは何かを考える上で、重要な意味を持ちます。これについても授業で簡単に取り上げるつもりですが、詳しいことは、昨年出版した私の『仏のイメージを読む』の第4章で書きました。お読みください。

恋愛対象と信仰の対象を結びつけて考えたことがなかったので、新鮮だった。言われてみれば納得。写実主義が嫌いな宗教が、いつから仏や釈迦を像として表すようになったのか？釈迦の将来を予言した人はすごい。釈迦に本人の葬式の方法を聞くのは、少し無神経な感じがした。

初期の仏教美術の特徴である釈迦の象徴的表現を、宗教と恋愛と結びつけて説明するのは意外かもしれません、宗教も恋愛も人間の心の働きに関わるという点で、とても近いものだと思います。人間の心は合理的に説明できるものではありませんし、特定の宗教を信仰することも同様です。誰かを好きになることだって、同じだと思いませんか？「釈迦の将来の予言」や「釈迦の葬儀の方法」は、その話だけ聞くと、できすぎとか、無神経という印象を持ちますが、むしろ話は逆で、釈迦と転輪聖王、つまり仏と王とのイメージの共通性を強調するために、後世の仏教徒が創作したとしたら、むしろ自然でしょう。テキストができる背景には、その創作者たちの周到な意図があるのです。

5月17日の授業への質問・回答

ガンダーラはあまり女性のことのが好きではなかったというのが意外でした。何か差別的な要素や宗教的意味合いがあるのでしょうか。また、ふと思ったのですが、こういった人たち（宗教家？僧侶？）の人に、女性があまり見られないのにも何か理由があるのですか。

ガンダーラの降魔成道に女性がいないということに、簡単に触れましたが、たしかに気になりますね。別に差別的な意味はありません。降魔成道で釈迦によって降伏させられる悪魔たちをどのように描くかは、地域によって異なります。授業でも紹介したように、ガンダーラでは勇壮な武将の姿と、獣の顔や体のあちこちに顔があるようなグロテスクな姿がしばしば現れます。いずれも武器を手にして、武力によって釈迦の悟りのじゃまをしようとします。降魔成道の物語では、悪魔にはこのような武力に訴える者たちと、もう一方で、性的な誘惑を仕掛ける女性たち（悪魔の娘たち）がいます。ガンダーラでは後者があまり好まれません（全くないわけではありません）。これに対して、インド内部、たとえばサーンチーでは、マーラはゴブリン（頭の大きな悪魔）のような姿をして、勇壮というよりも、むしろグロテスクで滑稽な姿をし、女性を伴います。授業で示したマトゥラーの五相図では、3人の女性だけが登場します。これらの作品では、降魔成道の主要なモチーフに、女性が不可欠と考えられていたことがわかります。このような違いがある理由は、いろいろな点から考えなければなりませんが、基本にあるのは、ガンダーラにくらべ、インド内部では女性を造形表現することが好まれ、しかもそれが得意であるということでしょう。これは仏教美術に限らず、ヒンドゥー教の美術にも当てはまることで、むしろ仏教以上に女性を表現することに力を注ぎます。有名なカジュラホでは、肉体をあらわにした女性たちが、男性と戯れる姿がヒンドゥー教の寺院の壁面を埋め尽くしています（私の「アジア図像集成」のサイトでも公開しています <http://air.w3.kanazawa-u.ac.jp/>）。

ひとつの図にひとつのテーマがあるのではなく、ひとつの図には複数のテーマがあり、それらがストーリーを追うようにならべられているのが、普通の絵と違うなあと思った。そして、ひとつひとつのテーマの中にもストーリーがあり、読んでみると、とても興味深いものだったし、読んでから図を見ると、その図にどのような意味が込められているかがよくわかりおもしろかった。

絵や彫刻などの美術作品を見る楽しさは、その形の美しさとともに、そこに表されているものが何であるかを知ることもあります。意味を知ることで、さらに深く作品を鑑賞することができるのです。このような体験は、これからこの授業で何度もあると思います。じっくり楽しんでください。美術作品を単に漫然と眺めているだけでは、ほとんど何も見ていないのとかわりがありません。そこに描かれているものをより深く知ると、作品はまったく違った様相をわれわれの前に表します。それはとても感動的な体験です。質問の中にある「普通の絵」というのは、おそらくヨーロッパ美術の、それもきわめて狭い時代のもの（印象派とかルネサンスとか）だと思います。ひとつの絵に複数のテーマがあることは、日本でも絵巻物でしばしば見られますし、ヨーロッパの絵画でもめずらしいことではありません。授業を通して、逆に「普通の絵」とと思っていたものが、とても限定的な特殊な絵であることにも気付いていただきたいと思います。

仏像を見るとき、仏のまわりのものは仏のありがたみを強調するための背景としか考えてていなかった。言われてみれば当然だが、まわりの人間や悪魔ひとりひとり意味があり、物語があることに驚いた。私が

「仏様」や「神様」を想像するとき、単なる「像」であり、「人形」であり、靈的なものである。しかし、当時の人々は、「仏」は実際に存在するもので、その存在の背景に細かな物語性を持っていたことを、スライドを見て非常に強く感じた。

仏像のような宗教美術を考える場合、それを「生身の仏」であると感じることは、とても大切なことです。授業で紹介した説話美術の場合、それはとくに強く意識されていたでしょう。前回の授業で紹介した、仏を表すのに人の姿をとることがためらわれるという感覚も、それが「生きた仏」だからこそ、感じられるのだと思います。指摘されているように、そこに物語性があることも重要なのですが、その一方で、物語性のない礼拝像（授業の後半で取り上げたような作品）は、たんなる「像」としかとらえられていなかつたかというと、そもそも言い切れません。そこでは、別のレベルで、「生きた仏」という意識が働いていたと思います。同じ「生きた仏」であっても、説話的な表現を好むのか、礼拝像的な表現を好むのかは、さらに別の視点から見る必要があるでしょう。京都の清涼寺というお寺に、有名な釈迦像があり、古来より「生きた仏」というような像として崇拜されていました。これはけっして説話図ではなく、礼拝像ですが、そのような例もあります。ちなみに、この像には胎内に内蔵の模型が入っていることでも有名です。このような方法で「生きた仏」を表現することもあるのです。

今日だけでも多くの仏像をスライドで見てきましたが、そのどれもが同じもののように見えてしまいます。先生はそのすべての区別ができるのですか？変な質問ですみません。

区別できます。できるから授業をしています。でも、みなさんも、夏休み前にこの授業が終わることには、しっかりと区別できるようになっていますから、安心してください（きちんと出席して、話を聞くことがもちろん必要ですが）。はじめは同じように見えるというのは、みんなそうです。あなた方も、はじめて大学に入ったときには、周りの人たちがみんな同じように見たのではないですか？だんだん、知り合いが増えるにつれて、区別が付くようになったはずです。仏像も同じです。

醉象調伏で、象が時間の移り変わりを表すために、二体の象が一枚の絵に彫られているを見て、日本史の資料集で見た同じような技法が使われている絵巻物を思い出した。たしかそれは僧が二人描かれていたので、インドから伝わった美術技法なのかと考えた。インドでは最初、説話的な仏像だったのが、次第に礼拝目的に作られるようになった変化が大きすぎるので、間の徐々に移り変わる流れも見てみたいと思う。

1枚の絵の中に複数の時間帯を表すことは、前にも書いたように、説話的な図像作品の常套手段です。「異時同図」とか「異時同景図」といいます。日本の絵巻物は、たしかにその典型的なものですが、けっして、そこにのみ現れる特殊な技法ではありません。日本史の資料集で見たという作品は、おそらく有名なですから「信貴山縁起絵巻」とかでしょう。その中では僧侶や尼僧、貴族など、重要な登場人物が時間の流れにしたがって、何度も登場します。授業ではあまりふれられませんが、インドにも同じような異時同景図がありますが、そこでは、時間の流れに厳密に沿っているわけではなく、別の原理も導入されます（くわしくは、現在文学部で行っている「仏教の空間論」という授業で取り上げています）。「最初、説話図だったのが、次第に礼拝目的に作られるようになった」という流れは、大まかに見れば正しいのですが、インド内部でもいろいろなケースがあります。パーラ時代の仏教美術に礼拝像が多いのは、その源流となるマトゥラーやサールナートで、もともと礼拝像を好む傾向があったからです。アジャンタなどでは、かなり遅くまで説話的な図像が好まれます。礼拝像の流行は、同時代のヒンドゥー教の彫刻でも顕著です。そのような要素も考慮に入れる必要があります。

私は仏伝図がとてもおもしろいと思いました。どのようなエピソードは、誰が考えたのですか？それとも

実際にあったことを誰かが書き留めていたのでしょうか。形に表した人々は、知り合いではなかったと思うので、エピソードから同じような形が生まれたことは、とても不思議だと思いました。それとも、ひとつの仏伝図がもとになって、まねをしていたのでしょうか。とにかく、ひとつひとつのエピソードがとてもおもしろいと感じました。悪魔だけの図はなぜ必要だったのですか？不思議です・・・。あと、なぜ鹿が出てくるのですか？不思議です。

たくさんの疑問を出してくれて、いいですね。学問は不思議に思うことからはじまります。ここであげてもらったものも、簡単に答えられることもありますが、なかなかむずかしいものもあります。人によって答えが違ったり、文脈によって異なる答えが可能となることもあります。一部の質問にだけ、私なりの答えを出しておきます。前半の方の質問は、仏伝の図像作品はどのように現れたのか、そのときに、テキストはどのような役割を果たしたのか、と言い換えることができると思います。仏伝図のエピソードは、それを見たり聞いたりした人たちが伝えていったもので、その課程で作品が生まれたと考えるのが自然です。現存作例の年代から考えて、このような作品は、釈迦の時代よりも数百年遅れて現れます。したがって、目撃者の情報から作られたものではなく、その時代に流布していたテキスト（文字だけではなく、口承伝承もあります）に依拠していたでしょう。しかし、それだけで図像作品ができるわけではなく、当時の造像の技術、人々の嗜好、美的感覚、用いられた素材などにも左右されます。同じエピソードであるにもかかわらず、造形表現が大きく異なることもあります。しかし、その一方で、遠くはなれたふたつの地域で、同じような図像が現れることがあります。その背景には、テキストがそれを強く規定する場合もありますし、図像の伝播が、その距離を超えて起こった場合もあります。そのときには、それぞれの固有の歴史的状況も考察する必要があります。この問題は、今回のテーマとも若干関係しますので、皆さん自身でも考えてください。

仏教説話とそれを表す仏伝図は、見ていておもしろかった。説話的要素があった方がわかりやすいし、私も興味が持てたのに、それが消失していったのは、なんだかもったいないというか残念な気がしました。今日見た仏像の中では、14の観音立像が好きです。引き締まってくびれたウェストが、うらやましいです。あと、説明があったようにも思うのですが、観音像の左肩の上にあるのは、蓮の花でしょうか。

説話的な要素が失われたのがなぜかという質問が、他にも多くありました。教科書では、歴史的な釈迦から、普遍的な（歴史を超越した）大乗仏教の仏に変わっていったということで、説明をしています。マトゥラーやサールナートなどの中インドでは、もともと説話的な要素が少なく、礼拝像を好む傾向もあります。ほかにもいろいろ考えられると思いますし、どれが正解ということはありません。どの答えで納得できるかは、自分自身で決めるのです。学問とはそういうものです。授業でお見せする仏像の中で、自分が自分の好みかを考えるのも楽しいです。そのようなことを意識しながら、注意して見ると、記憶に残りますし、展覧会などで本物に出会うと、感激します。以前、同じ授業で、「私のお気に入りの仏像」として、スライドの中の1点を感想の欄に記入してもらったことがあります、かなりのばらつきがあり、それぞれの嗜好があることがわかっておもしろかったです。観音の左肩の花は蓮の花で正しいです。われわれのイメージする蓮とは、かなり形態が異なりますが、これがインドでは一般的です。先日、京都国立博物館で『藤原道長展』を見てきましたが、そこに出品されていた子島曼荼羅という作品に、同じようなデザインの蓮がたくさん描かれていて、インドの伝統が忠実に伝わっていたことをあらためて感じました。

八相図での降魔成道で出現する多数の悪魔は、釈迦の心に巣く醜い自身であると考えられるとあるが、だとしたら、人一倍、釈迦自身、葛藤に苦しんだということになるのだろうか。

これは少し言い過ぎですね。資料として配付した八相図の場面の説明文は、あまり中身を確認せずに出し

てきてしまいました。降魔成道のこのような説明は、私はあまり賛同しません。これは、仏教学でひところ流行した「仏伝の合理的説明」の影響を受けたものです。有名な中村元氏などがよく書いているのですが、釈迦であってもわれわれと同じ人間なのだから、神話的なできごとなどは、後世のでっちあげにすぎないという主張です。しかし、そのような要素を落としていたら、「等身大の人間である釈迦」が姿を現すかといえば、絶対にそんなことはありません。そこには何も残らないか、残ったとしてもいびつな姿の矮小な釈迦像でしかありません。2500 年前に生きた人々を、われわれと同じ視線で釈迦を見ていたと思ってはいけないです。というわけで、少し不適切な資料を提示してしまいました。この部分は削除してください。

イメージは多様なのに、どの像も何かしら統一感を持っているのはどうしてですか。
多様なイメージが画一化していくことについては、もう少し先の授業で取り上げます。

5月24日の授業への質問・回答

「似ている」とはそっくり見た目が同じとだけ思っていましたが、中国などの文献に書かれた各仏像の意味だけ伝わったものが多いため、一見似ていないが、意味は同じであるという現象が起こるんですね。人々の姿（インドでの）に似せようとしたというより、ありがたい（または神聖な）ものの姿を、どうにかして眼に見えるようにしたいという情熱やあこがれが、少し異なるけれど、似た姿になった理由だとも考えました。

まったくその通りです。「似ている」という言葉を、授業ではかなり広くとり、似ていないけれど、表している意味は同じであるということまで、「似ている」と言っていました。イメージが似ていることと、内容が同じであることを、まとめていたわけです。その場合、いろいろなパターンがありますが、イメージが似ていても、表している意味が異なる場合もあります（授業ではふれませんでした）。むしろ、この方がイメージが伝播するときにしばし起ります。類型的にまとめれば、イメージも意味も正確に伝わる場合、その一方が伝わる場合、いずれも伝わらない場合となります。それぞれの範囲は明確ではありません。ありがたいもの、聖なるものをどうにかして表す、というのは、以前の授業で「仏陀の象徴的表現」でも問題にしたことです。結びつけて考えて貰うと嬉しいです。ヘビや爪の話もそれにつながりますが、特定の文化の「聖なるイメージ」と、人類に普遍的な「聖なるイメージ」があることを知っていただきたいたいと思います。「グロテスクなもの」というのは後者に属するでしょう。

スライドに入るまでの雑談のようなものも、大切な授業の一部だと思います。共通点といえば、見てわかるものばかりに目がいっていたので、意味としての類似という考え方には、すごくおもしろいと思った。仏像以外にも、そういうものがあるなら、いろいろ楽しめる世界が広がるだろうなあと思った。

そうです。雑談が大事なのです。私はあまり「雑談」とは思っておらず、むしろ、密教美術から読み取れることや、それを見るための視点を、そういうところでお話ししているつもりです。私はもともと美術史を専門とする研究者ではなく、宗教学や哲学（インド哲学）が専門です。美術史の授業であれば、スライドなどによる作品の説明が授業のほとんどですが、私の場合は、そこから読み取れることや、作品成立の背景などに関心が向けられます。美術史は作品（とくに質の高い作品）のよりよき理解を目指し、宗教学や哲学は、作品そのものよりも、そこから導き出される普遍的な問題を考えます。これは学問のタイプが違うからです。私自身は、意識的にその両者を統合しようとしています。これからの授業でも、スライドなしの話は毎回ありますが、皆さん自分が頭を使って考える時間もあるので、しっかり考えてください。

よその国で作られた聖なるもののイメージを、そのままの形で受け入れるのは、よく考えるとふしぎな気がしました。正確な文献があったとしても、自分のイメージと違っていたら、変えたくなると思います。私が信仰のために、仏像や仏画を描くとしたら、自分なりの聖なるイメージに合わないところは、変えたくなってしまいます。インドと日本で似ていない方が自然な気がしました。

おそらく、そのようなところもあったでしょう。実際、インドの仏像のイメージが、そのまま日本で再現されることは稀です。日本の（あるいは中国的）に変容した（あるいは改変された）イメージの方が多いでしょう。それでも、インドのイメージがはっきり残っている場合もあります。密教ではとくに仏のイメージを明瞭にすることが、いろいろな場面で求められます。文字情報としてテキストに残したもの、そのためです。日本の密教にとって、インドの密教が有していたイメージは、規範であり、正統であり、模

範であったのです。そこに宗教美術の特殊性もあります。仏のイメージはおいそれとは変えられませんし、変えてしまっては仏教として成り立ちません。

よく中学校や高校の教科書で、広隆寺の弥勒菩薩像の例が取り上げられているが、こんなにたくさんそつくりな仏像があるとは思わなかった。先生は似ている理由をいろいろ言っていたけれど、現代日本人が欧米文化を無性にかっこいいと思い、やたら取り入れたがると同様に、かつての日本人は仏教（密教）の思想、とりわけ芸術を最先端のものだと思って、流行に乗っかろうとして、そのまま真似したとも考えられないでしょうか。

たしかに、高校までの社会（とくに歴史）の教科書では、仏像を二つ並べて、よく似ているでしょう、で終わっていました。あるいは「当時の日本は中国の影響を受け・・・」というような記述が、頻繁に登場します。影響というのはなかなかやっかいな言葉で、それだけで済ませてしまうようなところがあります。しかし、文化は伝染病や黄砂のようなものではありませんので、自然に伝わったり、空を飛んできたりすることはできません。人間がそのあいだに必ず介在します。そして、人間であるからには、何らかの意志を持って伝えたのであり、積極的に伝えた理由や、あるいは選別して、伝えなかつた理由も考えなければなりません。私の所属する研究室は「比較文化」といいますが、同じような理由で、「A は B の影響を受けた」というような安易な比較はしないように、学生を指導しています。密教文化の受容を、現代日本の欧米文化のそれと対比しているのはおもしろいですね。当時の日本人にとって、密教はたしかに最先端のものでした。それは、コメントにあるような芸術の面だけ（かっこいいとか）ではなく、政治や治安、国家や国民の統合といったレベルで強く意識していました。当時の日本において、密教は単に仏教の教えではありません。人々を支配し、国を治め、その安泰をはかるために、国家が意図的に取り入れたものです。現代で言えば、最先端の科学技術（場合によっては軍事技術）を導入することに匹敵します。

体=自分のものだと考えると、精神（こころ）も自分の体という定義にはいるのですか？ そう考えると、傷ついたり、安らいだりするものである精神というものを、昔の人は両義性を持つ不可解な存在としてとらえてのですか？ どうやって扱ったのかが、ほんやりと気になりました。

ヨーロッパでは、精神と肉体を分けて考える二元論が一般的ですが、日本ではその境界は曖昧でしょう。皆さんは「こころ」はどこにあると思いますか？ まさか、爪や髪の毛と同じレベルで存在するとは思っていないでしょうが、肉体とまったく切り離されて存在するとも思っていないのではないかでしょうか。両義性というテーマからの質問だと思いますが、じつはこの問題は、もう少し先の授業で取り上げるトピックです。そのときにじっくり考えてみてください。

両義的存在というある種の特異性が、人々に創想像性や創造性を与え、それが宗教では「聖」を表す存在と位置づけられたりした、という話は興味深かった。明確にカテゴライズされない存在に対する不安定感をぬぐうために、人々はその両義性に「聖」としての属性を与えることで、安定を求めたのかなと考えた。・・・宗教は関係ないかも。

なぜ似なくなるのか。シンボルを表すものが、伝わる先ではタブーとなっているものなら、そこは消されたり、改竄されたりするのじゃないだろうか。

両義性について、きれいにまとめてくれています。まさにそれが宗教だと、私は思います。シンボルやイメージが受け入れ側で拒絶されるというのも、ときどきあるようです。たとえば、キリストのはりつけの姿は、キリスト教の教会では一般的ですが、南米に伝えられたときに、はりつけは犯罪者のイメージがあまりに強烈ということで、両手を広げて、人々を迎えるようとする姿に変えられたそうです。似ていま

ですが、表している意味はまったく違いますね。

金剛界と胎蔵界の違いは何？ 金剛界と胎蔵界の大日如来のポーズが違うことと、金剛界は五仏だけど、胎蔵曼荼羅の中心には九人の仏がいることが気になりました。文殊は知恵の仏というイメージがあったので、剣を持って獅子に乗っている姿は意外な感じでした。あと、ハスばかり見ていたら、茎付きの植物に違和感を感じます。今日、漢字で曼荼羅と書けるようになりました。

金剛界は『金剛頂經』、胎蔵界は『大日經』という経典に説かれた曼荼羅です。基本的に、曼荼羅はそれを説く密教経典があります。密教経典の数だけ、あるいはそれ以上の数の曼荼羅が存在することになります。金剛界と胎蔵界のそれぞれの曼荼羅の説明は、教科書のコラムのところで説明しておいたので、読んでおいてください。胎蔵界も中心には五仏がいます（金剛界五仏とは、一部顔ぶれが違います）。大日如来とその四方の仏たちです。残りの四人の仏は菩薩たちです。文殊が知恵の仏であるというのは、インドでも一般的で、剣は利剣といって、知恵を表しています。鋭いというのは、刃物にも頭の良さにも使われますよね。ただし、文殊が剣を持つようになるのは、中国からで、インドでは特殊な文殊（中国から逆輸入された可能性もあり）にのみ、剣が現れます。「曼荼羅」の二つ目の文字は「茶」ではなく「荼」であることに気をつけてください（コメントにはちゃんと正しく書けていました）。

「宗教と合理主義はどちらも間違っている。しかし、宗教は正しすぎて間違っているのに対して、合理主義は間違いすぎているために間違っている」イギリスのチェスターントンという作家の言葉らしいのですが、聞いただけなので、ちょっと違うかもしれません。でも、神（の住む世界）に対する熱い思いは、もちろん行きすぎることは多々あるわけですが、人間にとてたいへんなエネルギーを生むんですね。

はじめの言葉は私は知りませんでした。あたっているような気もしますが、反対のような気もします（宗教の方が間違っていて、合理主義が正しい？）。このようなうがった言い回しは、なかなかかっこいいのですが、そこから何かを論じることはできないとも思います。宗教が人間にとてたいへんなエネルギーを生む（人間が宗教に対して生むわけですが）のはたしかです。「宗教はアヘンである」という有名な定義もあります。

不空羈索観音像が二体とも縄を持っていましたが、縄はどの不空羈索観音像も持っているんですか？ また、縄は何のために持っているですか？ 何かの象徴なんですか？

不空羈索の羈索が縄のことです。仏像入門のような本には、羈索は獵師の投げ縄で、これで獲物を捕るように、人々を救済すると説明されています。しかし、これは間違います。だいたいが、投げ縄を使って人間の狩りをする観音菩薩なんて、変じゃないですか。インドでは羈索は一種の武器で、敵に投げると足に絡まり、動けなくなるものです。不空というのは、けっして失敗しないという意味で、この武器は百発百中なのです。

両義的存在は、分類できないため、人々に気味悪がられているという話は、とてもおもしろかったです。ヘビや私たちの髪の毛、爪は、確かにふしげなものであり、よく考えると、かなり気味が悪いと思うのですが、仏はどのように両義的なのですか？ 腕がたくさんあったり、その他の人間とは異なる部分が分類できないということですか？ 人々の潜在意識の中に、そのような分類できない=気味が悪いというものがあるのかもしれません、私は遠い国でそこまで似ているものができるとはあり得ないように思いました。あと、気味が悪いものは、なぜ宗教的な力を持つのですか？ よくわからない=神秘的ということが成り立つのでしょうか。

仏のイメージが両義的かどうかはわかりません。そこに現れるシンボルに、しばしば両義的なものが現れるということはあると思います。腕や顔がたくさんある仏が、両義的かと言われると、そうとも言えるし、そうではないとも言えるような気がします。「気味が悪い」とか「グロテスク」というのは、それを含む文化ごとに、かなり違いがあると思います。その一方で、そのようなものに、宗教的な力や「聖なるもののイメージ」を感じる人は、おそらく普遍的にいます。理由があって感じるよりも、直感的、本能的に感じるのでしょうか。特定の理由をふまえて、そのように学習するのではないです。

インドから日本への仏の伝播を聞いていてふと思ったんですが、当時（というのも大雑把ですが）の日本人の中に、自分たちのあがめている仏たちの源流がインドにあることを知っていた人はいたんでしょうか。もし知っている人がいたなら、玄奘のように、一生をかけてインドをめざしたものもいたのだろうか等といろんな想像ができるおもしろいです。ナチスや特攻隊の背景に、宗教的な考えがあるというのは、なるほどと思いました。

もちろん、仏教の源流がインドにあることは、当時の僧侶はみんな知っていました。お経や仏像がインドから伝わったことも当然ですし、お経の言語である梵語、つまりサンスクリットの学問も、日本で行われていました。日本からインド（天竺）を目指して、求道の旅に出た僧侶も数多くいました。行きたくても行けなかった明恵のような僧侶もいます。ナチスや特攻隊を、すべて宗教のレベルで説明するのも危険ですし、間違っていると思いますが、そのような行動に人々を驅り立てる考え方は、宗教の持つ衝動や扇動力に似たものがあります。信じるものがある人間は強いですし、場合によってはこわいです。

ヘビは嫌いです。やっぱり気持ち悪いので、全然さわれません。でも、先生の言っていたとおり、ヘビは何の部類にはいるのか、今思うととても不思議です。そして、このことを聞いて、理科の時間に中学生の時、ヘビはは虫類か両生類か何なのか迷ってたことを思い出しました。そこで思ったのですが、ヘビ以外にも、両義的な存在のものは何かあるのですか？ウナギやアナゴも両義的存在なのでしょうか。

ウナギやアナゴも地面をはっていたら、たぶん両義的な存在だったでしょうね。実際、どちらも実物はけっこう気持ち悪いですし・・・。動物で両義的なものとしては、少し特殊ですが、センザンコウ（アルマジロ）というアフリカの動物が、民族学や宗教学ではよく取り上げられます（Mary Douglas, *Purity and Danger*）。これもウロコがある動物です。両義的な存在をもう少し広く探すと、神話や昔話の登場人物で、トリックスターと呼ばれるものがいます。敵でも味方でもないのですが、そのような人物がいることで、物語がおもしろくなるような存在です。「ゲゲゲの鬼太郎」のネズミ小僧などが、わかりやすい例でしょう。

今日は日本の仏像もたくさん見られたので、とても新鮮でした。すごくはっきりとした特徴なのに、長い道のりを経て伝わることで、全然別のもののように感じるのは不思議だと思いました。先生、以前の授業でライオンに見えないという感想を書いたのに、忘れられているんですね・・・。先生におぼえてもらえるような感想を書けるように頑張りたいです。

これはどうも失礼しました。最近、物忘れがひどくて、という年寄りの言い訳しか思いつきません。昔の授業の QA をたまに見たりすると、こんなことを書いていたのかというのもたくさんあります。自分で書いたものも忘れるのですから、しょうがないですね（あくまでも言い訳ですが）。

5月31日の授業への質問・回答

すべての神々が釈迦が姿をかえたものだとする一元論を採用してしまうと、教科書の第1章に先生が書かれている「釈迦はすべての仏の理想のモデルであり、すべての仏が釈迦と同じ生涯をたどる」とする話は、釈迦と他の仏を分けて考えているように読み取れるので、矛盾するのですが。これは一元論の立場を持つ人と、そうでない人との差異なのでしょうか。もし、すべての神々が釈迦で釈迦が何度も同じ生涯を繰り返すことをしているとするなら、釈迦という仏は何と成長のない存在なのだろうかと考えてしまいます。うがった見方かもしれません。

「釈迦はすべての仏の理想のモデルであり、すべての仏が釈迦と同じ生涯をたどる」という考え方には、『華厳経』という経典で明確に示されますが、そこではすべての仏が釈迦であるという考え方まだ見られません。『華厳経』では、そのような根元的な仏は釈迦ではなく毘盧遮那という如来です。この仏が、密教になると大日如来になり、すべての存在物は大日如来と等しいという一元論的な世界となります。仏教の歴史は、人々が仏をどうとらえたかという歴史もあります。すでに、釈迦の時代において、釈迦以外にもかつて仏がいたという信仰が見られます。そして、時代が下るにつれて、過去ばかりではなく、未来にも、そして、この娑婆世界（つまりわれわれの住む世界）以外にも、無数の世界があり、それぞれに仏がいるという考え方が現れます。それと同時に、仏は涅槃に入るよう見えながらも、じつは永遠に消えることのない存在であるという考え方も現れます。このような仏は有名な経典『法華経』に登場し、「久遠実成（くおんじつじょう）の仏」と言われます。あらゆる仏たちが繰り返し同じ生涯を繰り返すのは、成長のない存在のではなく、逆にそれほど完全な存在だからです。

一神教と多神教はつまらない区別であるという主張が新鮮でした。私自身、日本は多神教であるために、宗教に対して寛容で、宗教戦争のようなものもありないのだと思っていました。しかし、今日の講義を聴き、必ずしもそうは言えないと思うようになりました。思い起こせば一向一揆などは、宗教をめぐる戦いであり、必ずしも多神教が寛容、仏教が寛容というわけではないと思い至りました。

前回の授業では、一神教と多神教という枠組みはナンセンスということを強調したので、それについてコメントをしてくれた方が多くいました。繰り返しになりますが、私の基本的な考え方として、特定の宗教を信仰しているからと言って、その人や民族が寛容であったり、寛容でなかつたりすることはないと私は思います。人々が戦争をするのは、宗教だけではないのです（もちろん、まったく無関係ではありません）。「それならば、キリスト教とイスラム教の対立の原因は何ですか」という質問もありましたが、世の中のできごとは、異なる宗教の対立だけで説明できるほど単純ではありません。アメリカのイラク政策を「石油をめぐる利権」と説明する人もいますが、それだけで説明するのも乱暴でしょう。宗教に限らず、あらゆる現象を二分法のような単純な枠組みで捉えるのは、しばしば危険を伴うことを、皆さんに認識してもらいたいと思っています。世界の宗教を神様の数（それも見かけだけの）で分けても、何もそこからは展開しません。既成の枠組みを疑うことから、学問ははじまります。

仏のイメージが地域によって異なっている意味がわかりました。今日の写真を見ていて、梵天はアヒル、帝釈天は象に乗っていましたが、乗り物にも「強さ」や「賢さ」といった意味が含まれているのでしょうか。あと、今日見た不動明王坐像と似たものが、大河「風林火山」にも出てきました。あれは地域的なものでしょうか。あと、全然関係ないのですが、ほっとけ（=仏）ないにはウケました。

神や仏が乗る乗り物は、その性格や出自を表すものとして重要です。とくにヒンドゥー教の神々は、それぞれ固有の乗り物を載ることが多く、区別するときにも便利です。梵天のアヒルも帝釈天の象も、ふるくから知られたものです。乗り物の動物がもつ意味はわかるものもあれば、わからないものもあります。梵天のアヒルはよくわかりませんが、帝釈天の象は権力や武勇と結びついた動物なのでしょう。その一方で、象は生殖、あるいは男性の性的な力とも関係があるようです。教科書や授業では水牛を取り上げて、それに関連する仏や神のイメージのつながりを考察しています。単なる乗り物や脇役ではなく、重要な意味を帯びた存在なのです。「風林火山」は見ていないので、不動明王に似た像はよくわかりませんが、日本の不動は特定の形式で作られることが多いので、おのずとよく似た像が現れます。授業で紹介したのは、高野山の金剛峯寺（不動堂）にあった不動明王坐像で、平安後期の典型的な作品です。不動の十九相觀という形式にしたがったものです。風林火山は信濃で、しかも戦国時代の話ですよね。大道具や小道具の人が、高野山の作品を参考にしたのでしょうか。「ほっとけ（=仏）ない」は、まったく私には記憶がありません。基本的に、そういう低レベルのギャグは言わないことにしているのですが・・・。

インドでは女性の仏の像も多いようですが、日本でも見られるんですか。はっきり女性とわかる仏像は見たことがないような気がしました。見てみたいです。

探せばけっこういます。たとえば弁財天（弁天）は、あきらかに女性の姿をとります。授業で紹介した摩利支天や鬼子母神も女性の姿です。薬師寺の吉祥天は樹下美人図の流れを受けたものです。しかし、インドの女性の仏が、その身体的な特徴をはっきり示しているのに対し、日本の女性の仏や神は、控えめですね。これは中国でも同様で、インドを中心とする南アジアの女性美と、中国、日本（たぶん韓国も）のそれとが異なるからでしょう。インドのほとけたちの世界では女尊はある程度、まとまった存在でしたが、日本や中国ではバラバラになることも、女性の仏の位置づけと関係があります。インドの女尊は、日本では観音や天のグループになることが多く、性別は不明です（観音が女性化することも関係あるかもしれません）。一部は明王にもなります（孔雀明王など）。

先生は本地垂迹説についてもふれていましたが、仏教とヒンドゥー教の神々も似ているものが多いので、本地垂迹説のように、それぞれ対応していたりするんですか。

インドには本地垂迹説のような考え方はないようです。ヒンドゥー教では仏教の仏もヒンドゥー教の神様のひとりくらいにしか考えられていません（しかも、まちがった教えを説いて、罪人を地獄に導くそうです）。かたや、仏教の方は、ヒンドゥー教の神は仏教の仏の支配下におかれるべきと主張しています（おそらくヒンドゥー教側には相手にされていなかっただろう）。インドの神々の世界は「大伝統と小伝統」という枠組みでとらえられることがあります。たとえば、村々で信仰されている土着の神は、じつはシヴァやヴィシュヌのような有名な神が姿をかえて現れたものだという考え方です。小伝統の無数の神々は、大伝統の少数の有力な神に包摂されてしまうのです。ここでも、一元論的な世界観が認められます。日本の本地垂迹説は、神仏習合という文脈で語られることがあります、この神仏習合という考え方も、いろいろなケースがあり、なかなかむずかしいです。

一元論の話を聞いて、ひとりの仏が TPO に応じてさまざまに姿をかえて、私たちの前に現れるのだとしたら、仏の数がものすごく多いので、むかしの人は悩むこと、救ってほしいと思うことが多かったんだなあと思った。さらに最後の話を聞いて、文献の中の仏が、作品の何百倍もあるというのを知り、びっくりした。イメージはできるけれど、作品にはできないだろうと思われる仏を、無理やり作品にしたとしても、今度はそれが聖なるイメージではなくなる可能性があるという話は、パラドックス？のようでなんだ

かおもしろかった。

仏の数が多いのはたしかですが、悩むことや救ってほしいと思うことは、たぶんそれほど種類がなかったような気がします（頻度は高かったでしょう）。人類の歴史の中で、現在はきわめて特殊な時代で、それまでの何百万年は、飢えと貧困と病気などの限られた悩みや苦しみしか、意識されていなかったでしょう（仏教ではそれを四苦八苦といいます）。それでも仏にさまざまな種類があり、それぞれ異なったイメージを持っているのは、それを生み出した文化的背景が異なるからだと思います。文献の中の仏の種類や数が、実際の作品よりもはるかに多いというのは、前回の授業のポイントのひとつです。これは私が、もともとは文献の研究を中心に行っていて、実際の作例を美術史的にあつかうようになったのが、それよりもあとだったから、とくに気になるのかもしれません。パーラ朝の仏像の全体像を見わたしても、文献の中の仏のほんの一部しか作られていません。しかも、その中で圧倒的に多いのが、伝統的な釈迦であることも驚きでした（密教経典には釈迦はほとんど登場しません）。ただし、作品としては残っていますが、マンダラの中でこれらの無数の仏たちが、実際に描かれていたはずです。そこでは、大量の「聖なるイメージ」が必要になります。そのための工夫を今回の授業で紹介します。

文字からイメージを作ることができなかったり、イメージの記述があっても、技術的に作ることができないことがあるという話はとても興味深かった。奈良の大仏が本当は宇宙と同じ大きさだというのも、まったく知らなかった。でも、本当に人々が聖なるイメージを仏に対して持っていたのなら、それを人の手で像にするのは不可能だとは考えなかつたのだろうか。少なくとも私は不可能だと思う。

最後の指摘の「人の手で像にするのは不可能」ということこそ、宗教美術の本質で、それを「偶像崇拜の禁止」などと呼ぶことがあります。それでも、なんとかイメージとして作る出すために、人々はさまざまな工夫を凝らします。人間は視覚情報をなによりも重視する生物なのです。

薬師如来が日本にしかないと聞いて驚いた。薬の壺を持っているということだったが、日本の風土か何かが、薬師如来を生み出したのだろうか。

五劫思惟阿弥陀如来坐像は、すごくかわいいと思う。髪の毛（螺髪）がのびても、毛先が見えないのが、非常に不思議。

薬師如来は説明不足でした。もともと薬師如来は、東方の仏国土の仏です（西の方は有名な阿弥陀如来です）。インドで成立した経典にも登場するので、インドで信仰されていたのはたしかです。医王、すなわち医者の王なので、人々を病気の苦しみから救ってくれます（金剛の近くにある医王山も、この仏と関係あります）。しかし、インドには薬師の作例は現存せず、仏像として表現されたかどうかは明らかではありません。薬師はインド以外の大乗佛教の国では作例があり、チベット、中国、朝鮮半島、日本など、いずれの国でも人々の信仰を集めました。アフロの五劫思惟阿弥陀如来は、いつも人気です。

阿修羅が仏のグループ名だと知って驚きました。教科書を読んだときにひとりの仏の名だと思って読んでいたので、話がかみ合わないというか、何かおかしかったので、原因がわかり、少しすっきりしました。デーヴァも神々のグループの名ということですね。五劫思惟阿弥陀如来坐像は、オープンキャンパスで見覚えがあります。あと、十一面觀音立像と、21の不動明王坐像も。不動明王の後ろには、鳥が三羽くらいいると聞いた気がしますが、どうでしょうか。

アスラ、すなわち阿修羅はグループ名です。デーヴァもそうで、こちらは天に相当します。教科書の記述は説明不足だったのですね。もう一度、そのつもりで読んでみてください。インドのヴェーダ文献と、中東のアヴェスターでは、両者の位置づけが逆転するのも、比較神話学や印欧語族の研究では常識なので、

知っておいてください。オープンキャンパスのスライドショーのことは、よく覚えていますね。十一面觀音も不動明王も、同じ作品が登場します。せっかくなので、この授業でも一度紹介しましょう。

インドにはない仏像が中国や日本にあることに驚いた。それだけあとから仏教が伝わったから、このような事態が起こったのですか？インドから仏教が伝わるとき、ヒンドゥー教の要素が加わってしまい、仏教を伝えた人たちはどう思ったのだろう。本当に仏教を信仰する人にとって、このような仏の存在はじゃまにならなかったのでしょうか。

インドにはない仏像が中国や日本にあることの理由はさまざまです。経典のような文献の中だけだったものが、中国や日本では造形化される場合もあります。逆に、インドには作例があるのに、中国や日本にはないものもあります。授業でカタカナで表記する後期密教の仏などは、ほとんど伝わっていません。ヒンドゥー教の神々の仏教での位置づけは、けっしてじゃまなものとか、余計なものではなく、重要なメンバーだったと思います。それらを含めて、当時の人々は、広い意味での「ほとけの世界」を信じていたのでしょう。それは日本などでも同様で、天部の神々、弁天や吉祥天、毘沙門天、聖天、帝釈天など、とくに民間信仰で重視されてきました。

火の神様が、水の壺を同時に持っているのが不思議だった。こういう二面性（と言っていいのかわかりませんが）は他にもあるんでしょうか。

火の神様アグニ（火天）は、火を用いて儀礼をおこなうバラモン（聖職者階級の名）のイメージが取り入れられています。胸の前で持っている火も、単なる火ではなく、護摩（ごま）という火の儀礼をおこなうときの炉の形をしています。水の壺は、バラモンの重要な身の回り品で、儀式を行うときの必需品でもあります。しかし、それだけではなく、水はインドの宗教世界ではきわめて重要な存在で、単なる物質ではなく、生命のある存在、つまり生き物でした。同じことは火についても言えることで、儀礼の時に用いられる火も一種の生命体としてあつかわれます。アグニはふたつの生命を手にしているのです。これらのこととは、以前に書いた『マンダラの密教儀礼』（春秋社）のなかでも紹介しています。

6月7日の授業への質問・回答

イメージの画一化というのがあったけど、私は信仰にはまず個性を殺す傾向があるのだと思う。とくに、信仰の対象となる絶対的な存在には、人間的な個性とかはじゃまになりうるだろうし、多くの信者を集めには、とくに「一般化」が必要なのではないかと思った。

まさにそのとおりです。宗教の本質にかかる、たいへんよい指摘だと思います。「イメージの画一化」については、授業では仏像のレベルの話に終始しましたが、最後にあげた「コントロールのしやすさ」というのは、指摘してくれたようなことも視野に入れていました。現実世界で画一化されたイメージを持つものは、いずれも厳しい規律のもとでの集団生活を送っています。学生、軍隊、受刑者、いずれもそうです。軍隊を例に取れば、そこでは上官の命令が絶対であり、個々の兵士は自分勝手に行動することなど許されません。兵士みんなが思い思いの行動を取れば、軍隊全体が崩壊してしまいます。そのときに、個性や自己主張を剥奪するもっとも効果的な方法が、外見、すなわち髪型や服装を画一化することです。宗教もそれと似たところがあります。神や仏の教え、あるいはそれを伝える教祖や先師の教えは絶対的です。自分の好きな方法で修行をしたり、自分の都合のいいように教えを解釈したりすることは、認められません。僧侶が同じ袈裟を着て、頭を丸めているのは、偶然ではないのです。とくに修道院や僧院のような、共同生活を送る場合はそれがより厳格です。その一方で、信者や修行者にとって、このような個性や自己主張の放棄は、ある意味、とても楽なことです。神や仏などの絶対者の前での自分の卑小さや無力感を知ることで、そのような存在にすべてをゆだねることができるからです。人間が宗教を求めるのは、現実世界は矛盾や非合理に満ち、それを自分でどうしようもないときなのです。

仏が大量生産されるとありがたみが無くなる気が・・・。でも、日本の場合、一体一体ちゃんと作っているみたいですが、日本でも大量生産された仏はなかったのか謎です。

「仏の大量生産」というのは譬えの表現で、実際に仏像が大量生産されたわけではありません。仏教の經典の中で、三世三千仏のように無数の仏が現れたり、宇宙に満ちあふれるさまざまな仏国土に、ひとりずつ仏がいたり、あるいは前々回取り上げたように、仏の世界に菩薩や天、女尊など、さまざまな仏が現るようになったことを「大量生産」と呼びました。そのときに、文献の中では名称をあらたに考えさえすれば、いくらでも仏が生み出されるのに対し、現実世界では、さまざまな制約があり、それに見合ったあらたな「聖なるイメージ」を生み出すことができません。実際、作品として作られた仏の種類は、ごく限られていて、しかも、同一グループの中では、同じような姿をとる傾向が顕著になるということです。日本での仏像の大量生産ということであれば、京都の三十三間堂の千手観音などが連想されますが、あれはかなり特殊なものです。木版画のような印刷物で、おなじ仏画が大量に作られることがあります。

仏の瞑想や、その像の大量生産にシンボルが重要な役割を果たすことがわかりました。画一化が仏のコントロールにつながるという話がおもしろかった（例もわかりやすかった）ですが、リアルに瞑想をするときには、そのものがごちゃごちゃいろいろな特徴をしていると、イメージしにくいと思うし、何か一番よい（と思われる）ものを思い浮かべるんじゃないかなと思う。日本の明王が全然違うという点では、日本がそこにイメージのしやすさでなく、見た目の良さを重視したものと思う。

「仏をコントロールする」ことについては、その理由がわからないというコメントも多くいただきました。たしかに、わかりにくいくらいですが、これについては、マンダラのところで説明する予定です（今回は

取り上げません）。それで、忘れてしまうといけないので、簡単にふれておくと、密教の実践法では僧侶が仏をその場に生み出し、仏に対して供養や礼拝をおこなうことが一般的です。その上で、その仏と自分自身が一体となるという瞑想をおこないます。さらに、特定の儀礼では、その場に生み出した仏を自在に操ったり、その仏を他の儀礼参加者の中に導き入れたりします。そうすると、その儀礼参加者も自分自身が仏と同一になったことを実感します。「仏となる」あるいは「仏とする」ということが、密教では可能であり、しかもそれが瞑想や儀礼において求められるのです。明王のイメージが画一化していないというのは、見た目の良さもあるかもしれません、むしろ、日本に伝わった段階では、まだ画一化が進んでいなかったことによるでしょう。日本ではマンダラに描かれた仏をのぞき、インドほどはイメージの画一化が進んでいません。明王も瞑想の対象となり、とくに不動明王の場合は、十九相觀といって、19の段階をふんで瞑想することが広くおこなわれました。

マンダラの中で仏の姿を描かないで、シンボルで表しているのが印象的でした。真言宗で梵字を見て瞑想するというのを、何かで読んだ気がするのですが、それも仏を表しているシンボルなのかなと思いました。真言宗でおこなう梵字の瞑想法は、「阿字觀」（あじかん）といって、大日如来を象徴する「阿」（悉曇といわれる書体で書きます）を前にして、瞑想をおこない、自分自身（とくに自分の心）と大日如来との合一感を体験します。マンダラにも仏の姿を描かずに、梵字だけで描いたものがあります。このようなマンダラを「種子曼茶羅」と言います。「種子」というのは、このような文字が仏を生み出すためのもとのようなものだからです。実際、密教の瞑想法では、文字やシンボルをはじめに生み出し、それをもとにして仏の姿を生み出します。文字にしろ、シンボルにしろ、シンプルなものが用いられるのは、それがわかりやすいからでしょう。ちょうど、道路標識のように、見た瞬間にそれが理解される必要があるからです。瞑想やそれによって生まれる神秘体験とは、一種の条件反射なのです。「止まれ」の標識が、他の標識と紛らわしかったり、あるいは、くどくどと説明文が書いてあったりしたら、止まるということがわからず、交通事故になってしまいますよね。

仏の表現が歴史をたどると円環している。モノにイメージを託したところから、人の姿をとり、そしてモノに還っていく。やはり精神／信仰の表現に人の姿は適しないのだろうか。人の姿は不完全さや時の流れから逃れえない存在であるという事実をも喚起させるのかもしれないと思った。しかし、始まりの頃のモノに仏を託したのは、偶像崇拜に対する抵抗からだったが、後世、モノに仏のイメージを託したことは、一面、人間の想像の限界であり、他方こうした限界ゆえの仏の完成とも言えるのかもしれないと思った。インドの密教美術において、初期の仏教美術の象徴的表現に似たものが現れることを、どのように解釈するかという問題ですね。象徴表現の復活と見るか、あらたな方法の発見と見るかは、見るものの視点によって異なります。私はどちらかというと「象徴表現の復活」と考えるのですが、「人間の想像の限界」というのも妥当だと思いますし、「限界ゆえの仏の完成」というのも、理解できます（表現そのものは矛盾しているような気がしますが）。想像することは創造することでもあり、あらたなイメージを作り出すことでもあるのですが、そのイメージのムダな部分（共通する部分）を可能な限り、そぎ落とすと、象徴になるという感じでしょうか。

仏を表すためには、仏そのものよりも、シンボルを用いた方が適しているということは、どうして言えるのですか。仏の数がたくさんあるからですか。はじめは仏そのものだったのに、途中から持ち物だけで違いを表すのは、めんどくさがりというか、けどとてもおもしろいと感じました。また、スライドはとても楽しかったです。とてもわかりやすく、先生の教科書もこれくらい簡単な文だったらよかったです。

と思ってしました。イメージが画一化することはおもしろくないと思っていたが、安定化するといったよい面もあるのだなあと気付かされました。

シンボルを用いるようになった理由は、違いをはっきり示すことや、儀礼や瞑想において、シンボルがしばしば用いられたこと、もともと、インドの宗教美術は、シンボルを用いた表現が好まれたことなどをあげることができます。最後の点は、初期の仏教美術と結びつけて考えましたが、ヒンドゥー教などの他の宗教美術でも同様で、ヤントラなどと呼ばれる図形では、神々の姿はやはり簡単なシンボルに置き換えられます。それが神を招くための「よりしろ」として機能するのも、密教の場合と同様です。スライドショー「仏像ふしぎ発見」がおもしろかったというコメントは、ほかにも多く見られました。仏像や仏教美術のなかで、おもしろそうなトピックを選んだものですが、それなりに授業で取り上げているテーマも盛り込まれています（三十二相や観音の性、宇宙と大仏など）。これにくらべて教科書が難しいというのは、「すみません」というしかないのですが、それなりに一般向けに書いたものなので、がんばって読んでください。同業の研究者の人たちには「難しい内容なのに平易に書いてある」という感想が多いのですが、まったくの初心者には難しいかもしれません。編集を担当された方も、本を作っている段階で、内容はかなり専門的ですねという感想をもらしていました。わかりにくいときは、繰り返して読んでみてください。

さまざまな仏が生まれても、最後には結局初期のシンボルだけのものになっていておもしろかったです。それだけ個々のイメージが定着したからできたことだと思うけど、ただ単に描き表すのが面倒だからこうなったのかもしれませんね。今日のオープンキャンパスのスライドはおもしろかったです。あらためて見ると、仏像の違いがはっきりしていたことがわかりました。地獄めぐりの方も見てみたいです。授業の最初で「宇宙觀」の話がありましたが、当時のインド人はすでに宇宙というものを知っていたのでしょうか。そうなると、西洋よりもインドの方が進んでいた（？）ですね。インドが「ゼロの概念」を生み出したのも、この仏教の宇宙觀と何か関係があるんでしょうか。

宇宙論については今回の授業から取り上げます。ただし、この場合の宇宙は、現代のわれわれがイメージする宇宙と同じものではありませんし、西洋の近代的な宇宙論や、科学的な宇宙の構造などに一致するものではありません（根底ではつながっているのですが）。むしろ「世界」や「全体」といった方が適切です。そのようなものに対する思考は、人類が文化を持つようになったときから、普遍的に見られます。授業ではそれと同時に、世界とわれわれ自身との関係も考えていきたいと思います。

キリスト教のイエスは神の子として信仰されています。イスラム教のマホメットも「預言者」です。このふたつの宗教は、イエスやマホメットの他として「神様」がいます。けれど、仏教は仏様以外に「神様」という存在は聞かないような気がします。仏様を救ってくれる神様のような存在として信仰しています。この点は仏教が神様というものをいくぶん近くに感じさせるのでしょうか。

神や仏に関するキリスト教やイスラム教（そしてユダヤ教も）と、仏教との大きな違いは、その数よりも、われわれとどのような関係にあるかでしょう。キリスト教やイスラム教の場合、われわれは神になることはありません。神によって救済されること、神の国で永遠に幸せに暮らすことなどを人々は求めます。それに対して、仏教は仏になることが最大の目標です（そうは思っていない人も多いでしょうが）。仏教は「仏による教え」とあると同時に、「仏になるための教え」なのです。悟りを開くことは、あらゆるものに可能ですし、それを実現させることができが仏教、とくに大乗仏教の理想です。授業でときどき取り上げるインドの神様、つまりヒンドゥー教の神様は、仏教では天部というグループにまとめられて、護教神的な役割を果たします。もちろん、ヒンドゥー教内部ではこれらの神々は至上神であり、むしろ、ユダヤ、キリ

スト教的世界の神に近い存在です。

密教がシンボル（カギ、核）をたよりに、目の前に仏の姿を呼び出すというのが、具体的なイメージが浮かばなかった。イタコさんと同じような感じで、靈感などを使うのでしょうか。

基本はヨーガです。定められた姿勢を取り、呼吸を整え、深い精神集中をおこないます。そのときに、真言という神秘的な言葉を発声したり、両手で印を結んだりもします。そのとき、靈感が必要かどうかはよくわかりません。仏教的な立場からは、神懸かりになるような靈感は、かえって低レベルの神（あるいはもののけ）が憑いただけとして、排除されます。しかし、まったくそのような能力（靈能力？）がない場合、仏を呼び出すことや、その仏とコミュニケーションをとることは難しいかもしれません。このような瞑想法はシャーマニズムに似ているという研究者もいます。

資料 22 ページの最後の方に、画一化がもたらしたものとして、意味の機能の低下と書いてありますが、シンボルしか残らないのなら、逆にシンボルの持つ意味というのは重要になってくるのではないですか？そのとおりですね。仏のイメージ全体の持つ意味が、シンボルに凝縮されるということでしょう。しかし、その場合、シンボル以外の共通部分は、個性的ではないということで、その仏の「意味」を表すというはたらきを失うのではないかと思います。私はイメージやシンボルの持つ意味は、単にその仏が誰であるかを表すだけではなく、ある種の「力」を持っていると考えています。そのような力が、個性を失い画一化することで、失われてしまうのではないかということです。その一方で、イメージをグループ全体で共有することで、イメージそのものは安定化するとも考えています。

出現した当時は強烈な個性を持っていた仁王や仏たちも、時がたてばそのグループ内で画一化が起こると理解した。降三世三昧耶会に見られるような仏を象徴化する試みは、そのような流れの中では当然のものだったのだろう。しかし、それはある意味では仏のイメージをないがしろにしているものではないだろうか。たしかに、イメージを抜き出せば、それが何を表すかは理解できる。ただ、それは同時に省かれた「本体」を表現する価値がないと切り捨てているように思われるのだが、基本的には私もそのように思いますし、それを意味や力という言葉でとらえると、前の回答と同様になります。ただし、「本体」を切り捨てているかどうかは、わかりません。このようなシンボルを用いる場合も、仏そのもののイメージは明瞭である必要があったと思います。瞑想や儀礼でシンボルが用いられるのは、それがわかりやすくて機能的だったからではないかと思います。

私も 2 年前のオープンキャンパス覚えています！！今日のパワーポイントを見て、薄暗い教室で先生とお話ししたのを思い出しました。

それはうれしいです。オープンキャンパスでパワーポイントのスライドショーをするようになったのは、3 年前からです。このスライドショーは比較文化コース（というか私自身）の自主企画で、文学部の他のコースは、わざわざこんなことはしていませんが、実際にそれを見た方たちがその内容を覚えていて、しかも入学してくれたのは、うれしい限りです（スライドショーを見たから、金沢大学を選んだわけではないとは思います）。薄暗い部屋なのは、スライドショーをするためのやむを得ない措置です。同じ部屋では、もう一方で「金沢大学所蔵の豪華本の展示」というのをやっていました。そちらもけっこう内容が濃いのですが、部屋が暗くてよく見えないので、若干、印象が薄いようですね。

6月14日の授業への質問・回答

インドの宇宙観があまりに数字で規定されていることに驚きました。世界の構成単位も規則的で、人工的な感じがします。私にはこれが「不自然」にしか思えないのですが・・・。それから、インド、仏教といえば、必ずといってよいほど花が出てくるのはなぜですか。蓮の花など神秘性を感じるものが多いからでしょうか。

世界が人工的で不自然なものというのは、まさにインドの世界の構造の特徴でしょう。世界は円や正方形という幾何学的な形態を持ち、すべて数字に還元されます。もちろん、このような世界はわれわれの身の回りには、存在しません。しかし、インド人にとっての世界とは、そのような身の回りの自然ではなく、もっと理念的なものようです。そのとき、その世界が秩序だったものであることは、何よりも重要だったのでしょう。英語で宇宙のことを *cosmos* と言いますが、これは *chaos* すなわち混沌と対になって用いられる言葉です。*cosmos* とは秩序なのです。それはヨーロッパのキリスト教世界でも同様です。現実世界でも、太陽や星の形や天体の軌道などは円やそれに近いものですし、宇宙の構造が規則的であることは、直感的にわかると思いますが、世界を表現するときに、それが反映されるかどうかが、日本とインド（あるいはヨーロッパ）との大きな違いなのでしょう。日本人にとっての世界とは「自然」なのです。蓮の花については、今回の授業で取り上げます。基本的に、生命のシンボルだと思います。

自分たちの見ている宇宙というのは、部分でしかないというのには納得させられました。また、自分というものも何億もの生命体を含めた全体が自分であるというのも理解ができた。自分の部分（たとえばビフィズス菌など）からは全体としての僕はおそらく把握できないだろう。ぼくたちが全宇宙を知ろうとしているのは、それに近いのかもしれないと思った。全宇宙=神で、宇宙はいくつもあって、またその全体があって・・・。無限ループのように思えてきました。実際そうである気もします。

「宇宙と自分」の関係が、「自分とその中の生命体」の関係と同じというのは、とてもよい指摘です。授業ではふれませんでしたが、私も考えていることですし、今回の授業はそのような考え方をベースにします。「私」の中の無数の生命体は、そのひとつひとつは「私」にとっては無に等しい存在でしょうが、それが集合体として存在するから、「私」という生命が維持できます。その場合の生命を全体としてひとつと見なすか、無数と見なすかは、視点が違うだけでしょう。宇宙も同様に、無数の生命で構成され、それが全体を構成していますが、全体をひとつと見なせば、ひとつの生命体になります。無限のループはそのとおりだと思いますが、無限にループしていることも、全体としてとらえることができるのではないかでしょうか。

私はどこからどこまでかという疑問は、今まで考えたこともなく、とても不思議だと感じた。結論は、外界からの侵入物によって、「私」と世界の境界線が見えて来るというものだったようだ。いまいちよく理解できなかった。手や足、爪、髪がなくなっていてもいいのなら、外界からの侵入物はもっと必要ないのでは・・・と思ってしまう。また、地獄は通過するものと見なされていたと知り、驚いた。

私の意図していたのは逆で、「外界からの侵入物」によって、むしろ「私」と世界の境界線が見えなくなるというのが、趣旨です。外界からの侵入物というよりも、私の体の内部にあるものは、外界とつなにつながっているということで、境界線がわからないということです。たとえば、食べ物はわれわれにとって、「私以外のもの」ですが、体に入り、消化されることで、徐々に体の一部、すなわち私の一部になります。

しかし、それはどこからなのでしょう。透明人間という存在が、小説やマンガにありますが、透明人間が食事をすると、だんだん食べたものが透明になっていくのでしょうか（そうでなければ、食べたものがずっと体の中で見えた状態であるはずです。あまり見たくないですが・・・）。爪や髪、手や足というものは、それとは逆の見方で、体を構成している（つまり「私」を構成している）と思っているものも、本当に本物であるかはわからないということです。そのような部分を仮に失ってしまっても、脳が「私」の中心にあると考えた場合、その脳だけで「私」ということを認識できるかということも考えました。前回の授業は、宇宙観をあつかうと同時に、「私」とはどこからどこまでかというのが、基本的な問題です。

仏教においての世界観は、今までの授業の中で一番おもしろい話でした。宇宙は宇宙でしかないとはじめは思っていたけれど、見ていたのは一部でしかなく、自分を含む宇宙をとらえられないということ、外界の考え方、を聞いていると、宇宙の写真に対する考え方も、自分という存在がいかに異物によって構成された（=宇宙を根源とする）ものだということに、感動を覚えました。地獄のスライドとてもおもしろかったです。

「一番おもしろい」という感想を持ってもらい、さらに感動を覚えてもらえて、とてもよかったです。授業というのは感動があることが一番だからです。新しい知識を得ることも感動ですが、それまで気が付かなかったことを知ったり、それまでの考え方方が根底から覆されたりすると、人間は感動するものです。宇宙（世界）とか私という問題は、荒唐無稽な感じがしますし、場合によっては宗教的な話になるのですが、人間が人間として存在する上で、もっとも基本的なことです。「世界とは何か」「私とは何者か」「世界と私はどのような関係にあるのか」というのは哲学の根本問題です。そして、哲学はすべての学問の基礎にあります。その場合、文系とか理系とかの区別はまったく関係がありません。

最初の話で、宇宙とは何か、という問にはポカンとしてしまった。考えたこともなかったので・・・。だが、今「宇宙」と聞くと、惑星や星々を思い描くが、昔の人は宇宙とは無数の仏が散在して、本質的に自己と同じであるなどと考えていたのであれば、宇宙とはいよいよ何なのかわからない。ただ、仏教における宇宙観は、本当に理解できました。今までの授業で一番おもしろかったです。

宇宙や私についてなど、皆さん、これまで考えたこともないでしょう。少なくとも、高校までの授業で、こういうことを考える機会はほとんどなかったと思います。「宇宙とはいよいよ何なのかわからない」というのは、本当にそのとおりだと思いますし、宇宙物理学などがどれだけ発達しようと、絶対に正しい答えなど出てきません。「一番おもしろかった」というのは、そのような「絶対にわからないこと」を考えることに、知的な興奮を感じたのだと思います。なお、ここで紹介したコメントは「おもしろかった」という肯定的な評価でしたが、その一方でかなりの数のコメントが「よくわからない」「ついていけなかつた」というものでした。もちろん、それも当然だと思います。このような問題に関心を持てない方も大勢いることもたしかです。前回の授業のはじめに、「このあたりからこの授業の佳境に入ります」と言いましたが、それは同時に、このあたりが宗教や哲学に関心を持てるかどうかの分かれ道になるからです。しかし、もちろん、できるだけ多くの方に関心を持ってほしいので、今回、補足的な参考資料を配付して、理解を促したいと思っています。また、7月上旬に『生と死からはじめるマンダラ入門』という本を刊行する予定で、そこでもこの問題をくわしく取り上げています。

想像できない空間的・時間的広がりを持った世界／宇宙、けれど想像が可能な範囲では、それは宇宙とは言えないのだろう。「私」という存在のあいまいさ、これもどこか「両義性」に通じるところがあるようを感じた。内と外、部分から全体へ、個の意識と世界、それらの不安定さ、あいまいさを逆に世界まで押

し広げることで、「梵我一如」という安定をえたのかとも思った。

宇宙というのが、われわれの想像を超えた存在であることはたしかにそのとおりだと思いますが、その一方で、人間というのは宇宙さえも越えた存在を考えます。つまり、神のような超越的な存在です。宇宙論が宗教で問題になるのは、そのような存在をつねに想起させるからでしょう。両義性から梵我一如へといいのはおもしろいですね。おそらく、インドの思想では個の不安定さというのはそれほど意識されず、むしろ、個であってもそこには秩序や完全性が備わっているということで、宇宙と本質的には同一であるということを考えたのだと思います。

仏教、インドの宇宙観が広大であるということは知っていたつもり、というか聞いたことがあったが、今日の話を聞いて、あまりの規模の大きさに驚きました。しかし、その世界がずっと続くのではなく、ある世界が一度滅んで、また生まれてきての繰り返しなのが、その他キリスト教や他の宗教、神話の中で、インドや仏教が持つ特徴のように思われます。遠い昔から世界の時間の広大さに目を向けていた、インドの人々の思慮深さを感じました。

世界が生滅を繰り返すというのは、前回の授業のポイントのひとつでした。世界の構造だけを紹介したのではなく、そこにサイクルがあること、それが世界の構造を規定していることが重要だと思います。世界は単に存在するものではなく、つねに変化し、見方によっては誕生と死を繰り返しているということになるからです。まさにそれがインドの特徴なのでしょう。インドの人々が思慮深いかどうかはわかりませんが、こういうことを考えるのが大好きな民族であるのはたしかです。日本人ではありえないことです。

宇宙は私——梵我一如ということばは真理を表していると思った。食べ物を食べるということは、多くの命を私の犠牲にすることだと思っていた。だけど「共生」だと考える方法もありだと思う。もうちょっと家で考えてみます。

わたしも「宇宙は私」というのは、けっこう真理だと思います。もちろん、実感はしませんが、そのように考えた方が、すっきりするような感じです。食べ物についてもそのとおりですね。われわれが自分の体内に入れることができるのは、すべて生命あるものです。あたりまえのことなのですが、なかなか気が付きません（犠牲か共生かは見方によるでしょう）。それと同じように、生命を生み出すのは生命だけです。クローンとか生命操作とかいますが、どんな場合でも、生命のもとになっているのは生命です。太古の海で発生したプランクトンのような生命から、無限に続く生命の連鎖の中で、われわれは存在しているのです。ぜひ、家でも学校でも、いろいろ考えてみてください。進化論や宇宙論（理系の）の本を、哲学的な視点から読むのもおすすめです。

地獄めぐりのスライド、おもしろかったです。地獄というと、嘘つきは閻魔様に舌を抜かれたり、煮えたぎった鍋の中に、人がうごめいていたり、ぐらいの知識しかなかったんですけど、もっと過酷な場所だったとは・・・。地獄はなんだか混沌としたものだと思っていましたが、意外に細かい制度？を設けて鬼たちは罪人を待っているんですね。でも、最後に菩薩がお迎えに来てくれるところが、少しほっとさせられました。地獄＝絶望ではなく、耐えることで乗り越えるものなんだなあと思いました。

授業の息抜きのつもりのスライドショーですが、こちらの印象の方が強くて、コメントにも感想が多くありました。ぜひ、授業のメインの仏教の宇宙観と対比して、インドと日本の「世界」に対する考え方の違いも考えてみてください。日本の地獄図の基本となっているのは、平安時代の浄土教の僧、源信による『往生要集』です。そこでは地獄の構造や苦しみがこと細かく記されています。ただし、最後のお迎えは、必ずしも『往生要集』の記述にもとづくのではなく、後世の地獄絵に現れる新たな要素です。しかし、そ

ここに日本的な「甘え」を私は感じます。地獄は苦しみの「場」ではなく、通過する「期間」であるところに、日本人の世界観の特徴があると思うからです（これは、現在、文学部でおこなっている授業「仏教の空間論」でくわしく取り上げています）。なお、「地獄めぐり」のスライドショーは、昨年の文学部で行った「行動科学序論 I」でも紹介したので、文学部人間学科の2年生の方にとっては、2回目でした。うっかり、忘れていましたが、受講していた人から指摘がありました。

仏教が世界をどのように認識しているのかおもしろかったです。人間はすべてを語ることはできない。形而上学はここからはじまりますが、仏様はそうではありません。何でも知っています。今日の講義で、科学に似た突き抜けた「さわやかさ」を感じました。

「さわやかさ」を感じてもらえてよかったです。それも感動の一種だと思います。神も仏もこのような「迷いの世界」とは無縁の存在のように見えますが、この「迷いの世界」が仏そのものという考え方も、仏教の特徴です。これはキリスト教における神の位置づけとはまったく異なります。仏が何でも知っているというのは、そのとおりで、仏教ではこれを「一切智」といいます。それはまた一方で、この世のすべてのできごとは「仏の了承済み」ということにつながります。この世は苦でできているといいながら、それは仏そのものであり、仏がそのように作り出したことになります。ここからは、「仏の名による絶対的な現実肯定」が生み出されます。それはそれでけっこう危険な考え方です（そういう意味で、宗教とは危険な存在です）。

また講義に関係ない質問ですが・・・。仏教が「仏になること」が最大の目標なら、誰でも仏になれるのですか？前の授業で、次の仏は数億年先に現れる弥勒だと聞いたと思うのですが。弥勒とは特定の存在を示しているわけではないのですか。

弥勒信仰は時系列上の未来の仏で、阿弥陀や薬師は空間的な広がりを持った世界観で説かれる仏です。本来、両者は別の信仰なのですが、ひとつにまとめると、この娑婆世界に釈迦の次にあらわれるのが弥勒で、現在でも別の仏国土にいるのが阿弥陀や薬師になります。『法華經』の冒頭の記述は、そのような広大な宇宙を背景にしています。「誰でも仏になる」というのは、また別の考え方で、しかもそれは日本の仏教の特徴ともなります。基本的に仏教は、生きとし生けるものはすべて仏になれますし、ならなければいけないのですが、それが実現されるには無限に近い時間が必要とも考えていました。しかし、その一方で、あらゆる生類は、すでに仏そのものであり、悟っているのであるが、それに気が付いていないだけであるという考え方も生まれました。如来像思想、あるいは本覚（ほんがく）思想といいます。日本の仏教はこれが基本になっていて、念佛を唱えれば極楽往生できるとか、ただ坐っていれば悟りが開けるという教義が主流となります（前者は浄土教、後者は禅宗）。「地獄めぐり」で示した「地獄を過ぎれば極楽に行ける」というのも、これに通じる考え方なのです。

6月21日の授業への質問・回答

なぜ舍利は遺骨ではなく、身体なのですか？現在はつぎつぎと移り変わっており、そのため、仮の身体も日々成長しているということでしょうか。今日の話は正直よくわかりませんでした。宇宙を個としてとらえ、宇宙は原因でもあり、結果でもあるという点で、命であり、命を持つ私と宇宙は同じ・・・ということですか。

前回の授業の内容は、「難しかった」「よくわかりませんでした」という感想が相当数見られました。ここで簡単にまとめておきます。

歴史的に、仏塔と舍利に関しては以下のようない事実が確認されます。

- ①釈迦が涅槃に入ったあと、舍利を納めるために、複数の仏塔が建立された。
- ②アショーカ王の時代に舍利を取り出し、八万四千の仏塔を造って納めなおした（この数は仏教の教えである法門に一致する）。
- ③その後も、アジア各地でおびただしい数の仏塔が作られた。
- ④仏塔は仏教の宇宙観を反映した構造を持つ。
- ⑤仏塔のまわりには水に関するモチーフが数多く見られる。

これらの事実に対して、ひとつのまとめた道筋を見つけるのが、授業のねらいでした。そのときのキーワードが「生命」です。

このうち、①から③は、舍利を納めた仏塔で世界が覆い尽くされ、それは仮の教えと仮のものが世界を覆うというイメージとなります。舍利が遺骨ではなくて、身体であるというのは、仏塔の場合に限ったことではなく、「舍利」(śarīra) という言葉自体が、もともと「身体」を意味するということです。世界が仏塔で埋め尽くされているというのは、世界が仮によって満ちあふれているという、前々回の仏教のコスモロジーに一致しますし、そもそも、宇宙は無数の須弥山世界で構成されていました。

④と⑤からは、宇宙が卵によって表され、それが水の中に浮かんだイメージとして、仏塔に投影されたと見ることができます。授業では指摘するのを忘れましたが、この背後には、「世界は太古の海に漂う卵として誕生し、そこから展開して、現在の世界が形成された」というインドの古い神話を指摘できます（資料集の32頁参照）。生命が海から誕生することは、科学的な知識としてもわれわれは持っていますし、それは古代のインドの人々も直観的に知っていたことでしょう。われわれ自身も羊水という「海」から誕生します。このふたつから、宇宙は生命あるものとして誕生し、それが成長し、増殖していく、そしてその状態が、仮が満ちあふれたイメージでとらえられるということになります。

このことを、別の視点から説明したのが「因と果」なのですが、こちらが特にわかりにくかったという感想が多かったです。因中無果論とか因中有果論という用語を出したのがよくなかったようです。授業でも使った料理の譬如で、材料、作り手とエネルギー、そしてできあがった料理という三つの要素で説明します。「ブラフマンは材料（質料因）であり、作り手とエネルギー（動力因）であり、できあがったもの（果）として顕現する」と、インドでは説明されることがあります。この場合のブラフマンを宇宙に置き換えることができます。料理では、材料と作り手、そしてできあがったご馳走は別々です。材料がひとりでに形を変えていくこともありません。材料を置いておけば、自然に姿が変わって、加工されてご馳走になることなどないからです。しかし、このような、因と果が同じもの、あるいは因が自然に形を変えて果になるものが、この世にただひとつ存在します。それが生命なのです。受精卵が、時間とともに人間の姿をとっていくというのは、そのわかりやすい例だと思います。もっとも、われわれは生命をわれわれの身

体として認識するので、外からいろいろなものを取り込んで、成長していると思います。しかし、前々回の授業で説明したように、われわれを構成しているものは、つねに身体の外とつながり、行き来があります。そこではわれわれはわれわれ以外のものと密接に結びつき、その境界はきわめてあいまいです。そして、私を極限まで拡大すると、宇宙全体と重なります。その両者を結びつける共通点は、生命なのです。前々回の授業で、世界と私の関係を詳しく見たのはこのためでもあったのです。

前回の授業で配付した資料は、このあたりのことをまとめたものです。授業で紹介するのを忘れましたが、読んでおいてください。配布したのは私の『仮のイメージを読む』の第4章の冒頭です。このあと、どのような展開になるのか気になる人は、図書館にもありますので、読んでみてください。

宇宙をひとつの命としてとらえるという考え方は新鮮でした。思ったのですが、私たち人間ひとりひとりは、細胞に値すると思うのですが、細胞は結局、命を生かすために存在するということになるはずなので、私たちのために宇宙があるのではなく、宇宙のために私たちがいる。前回の授業でやった、私自身が宇宙の一部であるということが、何となくわかったような気がした。

何となくでも、わかっていただけるとうれしいです。細かい議論はともかく、全体的なイメージを持つことが大事だからです。宇宙全体をひとつの生命体としてとらえる考え方からは、全体である宇宙のために、われわれ個々人が存在すると見る見方とともに、宇宙が私たちのためにあると見ることも可能だと思います。むしろ、両者が相互依存の関係にあることは、前々回の授業での、私を構成する異物と私自身の関係でも見たとおりです。ただし、全体のために個があるという考え方には、多くの宗教が説くところもあります。全体が神や理念にもなります。それは、全体の中に埋没することで、個である人間は安らぎを得られるからでしょう。しかし、それは同時に、個の主張や存在意義を否定することになります。それも宗教の持つ「両刃の剣」の性格です。

今までさまざまなインドの神々を勉強してきたが、正直たくさんありすぎて、わけがわからなかったが、前回、今回のインド仏教の宇宙観の講義によって、多様な仏たちの根底が、「宇宙=命」ということに集約されていることがわかった。また、多種多様な神は、人々の信仰をニーズに合わせて集めやすく、さらには元はひとつであり、自分も宇宙の一部であるという考えを広めることは、仏教での統治をすすめるのに、当時の支配者にとっても都合がよいように思う。

この授業のねらいは、シラバスにもあるように、インドの仏たちの世界を知るだけでなく、その背後にあるインドの文化や人々の考え方を知ることもあります。そのような理解をしてくれているようで、よかったです。「当時の支配者にとっても都合がよい」というのもそのとおりで、上にも書いたように、しばしば宗教は、信仰と引き替えに思考や批判をストップさせてしまいます。舍利信仰が日本で王権と結びついたことに言及したのも、そのことを意識したものです。宗教が世俗の世界で力を持つのは、このような人々の統治に有効だからです。世界の紛争がしばしば宗教と結びつくのは、あたりまえなのです。

人間は生まれる前は魚であるという言葉に、はっとさせられました。生まれる前のことをあまり考えたことがなかったけど、本当に水の中にいたのだとあらためて感じました。ちらっと出てきた言葉ですが、私はこの言葉が今日一番印象に残りました。

生物学の有名な定義に「個体発生は系統発生を繰り返す」というのがあります。平たく言えば、われわれが生まれて成長する過程は、人間という種の進化（さらには生物の進化）を繰り返しているということです。母胎の羊水の中で成長する受精卵は、地球上の生物の何十億年もの進化を、ものすごいスピードで再現しているのです。母親の羊水は、生命が誕生した太古の海ということになります。ちなみに、人間の血

液の塩分の濃度は、この太古の海と同じなのだとさうです（太古の海は今の海より濃度が高いそうです）。そのときの生物は、体の外にある海の水を、体の中に入れたり出したりして生きているような単純な構造でしたが、進化した人間もその体の中に、太古の海を閉じこめているのです。私はこういう話がけっこ好きです。

仏舎利を増やして仏塔を増やし、そしてまた仏舎利を・・・という考え方があるが、前回、宇宙は無数の小世界があり、それぞれに仏が存在するという世界像をそのまま再現しているということを、そのまま表現しているように思われます。むしろ、素直すぎる発想くらいに思います。その篤い信仰心がうかがわれます。最近の授業を受け「仏」に対するイメージが大きく変わりました。近所にも仏舎利があるんではないかとまで思われます。

仏舎利はたくさんあります。たぶん、近所もあります。私の知り合いのお寺関係者にも、何人かは仏舎利を持っています。それくらい、仏舎利はポピュラーなものです。増え続けるのですから、当然かもしれません。一時期、インドから中国への重要な輸出品に仏舎利があったと聞いたこともあります。仏のイメージが変わるのは、この授業のねらいでもあります。単なるありがたいものとか、信仰の対象というだけではなく、われわれ人間の考え方や世界のとらえ方を、仏を通して知ることができます。増殖する仏舎利とインドの宇宙観が重なるのはそのとおりです。仏教の宇宙観をあつかった前々回の授業はそのための伏線でもあります。

もともと地球は因であり、今の私たちの生活は果である。だけど、少なくとも地球はまだまだ続くのであり、果とは言えないのではないかと思う。果にはなりきれない存在、つまり因しかこの世には存在し得ないのではないかかなあ。今日の授業は、ちょっとでもボーっとすると、わからなくなるような難しい授業でした。

因と果としての宇宙とは、地球とか私たちの生活という特定の部分のことではなく、そのすべてです。宇宙が誕生し、存在し続けるのであれば、誕生した瞬間の宇宙はその後の宇宙の因となりますし、つねに、宇宙は果として存在し続けることになります。どの瞬間を切り取っても、宇宙はその前の瞬間の宇宙の果として存在するとともに、次の果の因となります。私の授業は「ちょっとでもボーっとするとわからなくなる授業」というほど緻密な内容ではありませんが、いちおう、いろいろなことが関係して、議論が進んでいきますので、何と何が関係しているのかは、注意して聞いてもらえるといいでしょう。書いたものはもう少し緻密です。

仏とは何か。仏とは宇宙であり、生命であるということは、仏は「私」でもあるということにもなるのだろうか。仏は世界に満ちているものであり、また、その世界自体もある。というこのマトリョーシカのような構造はおもしろいと思う。そして、それは水であり、生命でもあるのだろう。しかし、遺骨が生きている身体であり、増え続けるものであるという感覚は理解しがたい。王=仏というイメージもあることもあり、政治と仏教という見方もおもしろそうだ。

仏は「私」であるという理解は、そのとおりです。大乗仏教は基本的にすべての生類の成仏、すなわち仏となることをめざします。これは言い換えれば、すべての人には仏となる素質をすでに有していることになります。日本ではさらにエスカレートして、山川草木悉皆成仏、つまり、山も河も草も木も（もちろん人間も）、あまねくすべて仏となるというテーゼがあらわれます。本覚（ほんがく）思想と言って、すべてのものはすでに悟っている、つまり仏であるということになります。この考え方には、日本仏教では、ほぼすべての宗派の基本となっています。浄土教も禅宗もそうです。だから、念佛を唱えるだけで極楽に往

生して仏になれたり、無念無想で座禅を組んでいれば突然悟ることができるのです。ついでに言えば、最近、有名人が書いた般若心経の解説書がいくつかブームになっていますが、そこに書いてあることは、この「私は仏であり、宇宙である」というのが多いようです。今さら発見したような書きぶりですが、そんなことはインドではあたりまえですし、日本ではもっと過激な考え方方が、ずっと昔からあったことには気が付いていないようです。

水、女性、生命というつながりはすごく納得できた。仏塔は仏のイメージということだったけど、私はずっと古墳のイメージは子宮だった。「生命」という点では、共通していますよね。

古墳をはじめ、古代における支配者の墓は、死者の世界という性格があります。地上における支配権を、死者の世界でも維持するために、その内部に「理想の世界」を作り出すこともあります。高松塚やキトラ古墳で、天球図や風水思想にもとづく四聖獸が描かれるのはそのためです。それと同時に、そこはよみがえる場所でもあるので、子宮のイメージも込められているかもしれません。基本的に、家とか宮殿は生命が再生するための母胎でもあります。

昔、自分自身をどんどん細分化していくとどうなるかと考えたことがある。細胞→分子→原子とどんどん小さくなっている、そこに限りはないと思ったことを覚えている。今、考えると、それは仏教の宇宙観と近いものであったように思える。「私」という命は、無数の命（細胞、分子、原子）によって構成されており、その「私」も宇宙の細胞のひとつであり、宇宙そのものの、そんなふうに理解しました。そうすると、宇宙=仏であるなら「私」も仏であるように思えてしまうのですが、さすがに飛躍しすぎでしょうか。いえいえ、そのとおりです。上にも書いたように、そこから「私は仏」までは論理的にも自然につながっていきます。「自分とは何か」をすでに考えたことのある人には、このところの授業の内容は、理解しやすいのでしょうね。

百万塔陀羅尼、法隆寺で見たあれかと思って、うれしくなった。どんどん平面だった知識が奥行き深くなっているのを感じます。知識がつながる楽しさ。

法隆寺は、たしか百万塔陀羅尼が一番多く残っているところですね。他にもあちこちの博物館に少しづつ残されていて、私は昔、大英博物館で展示されているのみたことがあります。知識が平面から立体になるのは、実感としてそのとおりです。知識がつながるのは本当に楽しいです。今回からのマンダラの話も、これらの知識を前提にして、それをつなげる内容になるはずです。まだつながっていない人も、これからつながっていくはずですし、どこかの時点でまとめますから大丈夫です。

6月28日の授業への質問・回答

最初の 20 分の説明で、前の授業が少しあわかったような気がします。マンダラが宇宙で包まれていると知り、今までの話がつながっているのだとわかりました。バスも出てくるのですね。マンダラと子どもの絵が似ているというのに、びっくりしたけれど、今日の話を聞いて納得しました。マンダラを描いた人は、いろんなことを計算して描いているのだとわかった。仏塔を上から見た図と、マンダラがつながっていて驚きました。

少しでも「わかった」という感覚を持っていただけるとうれしいです。はじめのガイダンスでもお話ししましたが、わからなかつたことが「わかった」と感じることが、この授業のめざすところです。もともと、密教もマンダラも、そして仏教そのものも、難しいとか、よくわからないというのが社会の通説となっていますが、実際はとてもよくできています。とくに、マンダラはこれまでの授業の内容と密接に関わっています。マンダラについての説明が終わったところで、全体をふりかえりますが、じつは、配付資料の表紙の裏に、すでにその図式は示してあります。先取りして、見ておいてもらってもいいでしょう。マンダラを子どもの絵から理解するというのは、私がこれまでに本や講演会などでよく用いた方法です。意外なつながりに、見る人はたいてい驚きます。ただし、オリジナルのアイディアは私自身のものではなく、チベットのマンダラを専門とする別の先生がおっしゃったことです。10 年以上前になりますが、雑談の中でその先生が「子どもの絵の表現方法が理論化されていたら、それがマンダラの説明でも使えるかもしれません」と、おっしゃったのです。ためしに調べてみたら、レントゲン描法とか展開描法とかが、まさにぴったりでした。

スライドでチベットのマンダラを見て、外側の大きな円が、宇宙を表しているのだといわれましたが、どうして「宇宙」を表現する形を円にしたのでしょうか？宇宙に限りはなく（限りがないということが、どうしてわかるのかも疑問です）、当然、形だってわからないのに、なぜ、円で宇宙を表すことにしたのでしょうか。

私も、まさにその点をこのあいだから問題にしています。宇宙を何かで表現するというのは不可能です。全体を部分で表すことなど、絶対できないからです。私たちのイメージする「星がまたたく宇宙空間」も、部分でしかないことは、前から強調していることです。しかし、それが「現代の宇宙のイメージ」であることは、現代が科学技術の発達によって、そのようなはるか彼方の星の集まりを見ることができるということを、背景に持っています。べつに宇宙の部分であるならば、地球だってそうですし、私たちだって「部分」であることにはかわりはありません。つまり、表すことが不可能な「全体」を、どのように表現するかで、その文化がいかなる特徴を持っているかがわかるのです（さしづめ、現代であれば、科学に対する楽観的な信頼とかでしょう）。マンダラが「宇宙」とか「仏の世界」と定義されるのは、マンダラが本当にそれらを表していると考えるよりも、マンダラに見られる表現方法から、当時の人々が「宇宙」や「仏の世界」をどのようにとらえているかがわかるのです。むしろ、マンダラは「なぜ、どのように表されなければならなかったのか」と考えるべきなのです。宇宙を円で表す理由は、自由に考えてみてください。私もときどき、「これが宇宙だとします」といながら、黒板に大きな丸を描きます。正方形や星形でもいいのですが、円が一番楽ですし、それらしい気がします。

マンダラの表現の仕方と、子どもの絵の表現に近しいものがあるということ、中心にいる仏、または子ど

もから見えるように描かれという話は納得したけれど、そのときは少し素朴すぎる気がした。しかし、ボッティチェルリやピカソの話から、画家が自分のイメージ、描きたいものを描くというのを聞いて、絵の表現に上手、下手はあっても、上等、下等はないんだなあと感じた。むしろ、古代の絵画にはさまざまな視点をもって描かれたものが多いことを考えると、マンダラの表現は自然なものだろう。

有名な西洋の絵画を紹介するのは、絵は画家が見たものをそのままに描いたものではなく、画家が表現したいものを、さまざまな仕掛けやトリックを使って、しかもそれがわざとらしくないように描いたものであることを紹介するためです。その意味で、「何を描く」ということと同じくらい、「どのように描く」かが重要になります。それが画家による「世界」のとらえ方になるからです。それと、私たちの描く絵が、ほとんど線遠近法によって支配されていることも、じつは特殊であることも知っていただきたいと思います。人類の絵画の歴史の中で、厳密な線遠近法が支配的であった時代は、じつはとても短いのです。ルネッサンスの終わりにはすでにくずれはじめています。

「マンダラとは仏教的な宇宙を表しているものである」今まで漠然と「ああ、なんだ」と思っていましたが、先生の月の石の話で、無理して理解しようとしなくていいとわかりすっきりしました。話が変わりますが、マンダラの絵柄がどぎつい極彩色で、見ていて目がちかちかします。そうした表現の方が、仏のありがたさを強調できるからそう描いているのでしょうか。あ、あと、マンダラが「内からの視点」で描かれているという話も新鮮でした。

そうです。無理して理解する必要はまったくありません。私はへそ曲がりなので、ひとが「これが宇宙です」と言うと、つい「どうして、そんなものが宇宙であるはずがあるのか」と反論したくなります。学問をしている人は、へそ曲がりの人が多いでしょうね。マンダラが極彩色で描かれているのは、そのとおりで、とくにチベットのマンダラは、日本人にとってかなりきつい配色に見えます。しかし、中国から日本に伝わった当初は、まさにこのような「どぎつい」色のマンダラだったはずです（もちろん、若干、チベットのものとは違いますが）。それが、当時の日本人にとって、圧倒的な迫力を持っていたことも容易に想像ができます。空海がもたらしたマンダラは、一辺が4メートル以上もある巨大なものだったのですから、その迫力も相当なものですね。インドの文献では、砂曼陀羅を作るときの素材として、ルビーやラピスラズリなどの宝石をあげるものもあります。キラキラするのがマンダラの理想でもあったようです。

マンダラの内部の枠が宮殿を表しているところが、「仏=支配者」といった、仏の王者的イメージを、見る人に与えているように思いました。マンダラは透視図、複数の視点での画であることに気付いたとき、なぜ先生が先に子どもの描いた絵を見せたのかがわかりました。難解そうなマンダラの図が、じつは子どもの絵にヒントがあるということ、驚きです。

仏と王とのイメージの重ね合わせとか、仏法という真理によって、世界が支配されるという、これまでの授業で取り上げてきた考え方が、マンダラを理解するときに有効であることが、今回の授業でも繰り返されます。そこに儀礼の要素が加わることで、マンダラの表現方法の意味が、さらに明らかになるからです。そのような意味で、マンダラとは芸術作品ではなく、儀礼の装置なのです。子どもの絵をマンダラの説明で見せるのは、上にも書いたように、意外な共通点があって効果的なのですが、それとともに、講演会などでは、子どもを取り上げると、雰囲気が和むからでもあります。コマーシャルや広告の定番で、ネタに困ったら、子どもか動物を出すというのがあります。テレビドラマでも、子役がうまいと番組が生き生きとします。

マンダラにもいろいろ種類があり、それは子どもや西洋の画家にも見られるように、・描きたいものを描

く、・描きたいものをめだたせて描く、といったようなところに共通点があることがわかった。何人もの人が、自分の理想の宇宙というか、自分が考えた宇宙を描いたから、種類や形がこんなに多いのかなあと思った。見やすいように、本来、見えないようなところでも、目線をその場所だけ変えて描くことで、見せたいものは、すべて見えるようになる描き方は、頭がいいと思った。一枚にすべて見せたいものを凝縮できますものね。「マンダラは設計図」というのにしたがって、宇宙図（マンダラ）を立体にすると、マンダラの良さがほとんど失われて、マンダラらしくなくなるというのはおもしろかった。

マンダラの種類は本当に多く、インドやチベットの伝統では、何十、何百というマンダラがあらわれます。チベットのお寺に行くと、壁や天井にこのような多様なマンダラが描かれていることがあります。これらは驚かされます。これらのマンダラの系統を調べるのも、マンダラ研究の重要な点ですが、授業ではそこまでは立ち入りません。関心がある人は、文学部での私の授業に出てください。3年間に1度程度、マンダラだけを取り上げて、1年間講義します。日本ではマンダラは金剛界と胎蔵界に限定されるのですが、それ以外にも、別尊曼荼羅、神道曼荼羅、淨土經曼荼羅、參詣曼荼羅などのジャンルがあらわれます。それぞれに何種類もマンダラがありますが、それはインドやチベットの多様なマンダラとは一致しません。日本では密教以外の宗教でもマンダラを名前に付けた作品があらわれますが、インドやチベットでは密教のものだけです。このようなマンダラの展開に見られるそれぞれの文化の違いも、私の研究テーマのひとつで、上記の学部の授業でも取り上げます。

仏教の最終目標が仏になることだとしたら、仏の世界を中から見るのは、仏にならないと見れないから、曼荼羅が悟りの境地であるとするのも納得です。仏の世界は物質がないとこの前、習いましたが、曼荼羅の中には宮殿が描かれているものもあるんですね。ハスに座ってる仏ばかり見てきたので、豪華なチベットのマンダラは変な感じです。チベットの作品は他のものと違いますね。

仏になることと、マンダラで視点が中央の仏にあることは、まさに密接に関係して、今回の授業の中心テーマとなります。仏になる儀礼のための装置がマンダラだからです。仏の世界には物質がないというのではなく、われわれの輪廻する世界には、物質がある世界（欲界、色界）と物質を超越した世界（無色界）があり、仏の世界はそれらとはまったく別のレベルの世界であるということです（補注・ただし、これはアビダルマという部派仏教の考え方で、大乗仏教や密教では少しこなります）。そのため、仏の世界はわれわれの眼に見えるようなものではないのですが、それを仮にマンダラの形で表しているのです。「宇宙は表現できず、便宜的な形態で表される」というのと同じです。そのときに、宮殿やハスの花を使うことの意味を考える必要があります。マンダラは全体がハスの花でできていますが、よく見ると、じつはそれぞの仏も、ハスの花に乗っています。これは、舍衛城神変で、巨大なハスの花に乗った釈迦のまわりに無数のハスがあらわれ、そのひとつひとつに仏が乗っていたイメージと共通です。

以前、曼荼羅は僧が目隠しをして、両手の人差し指ではさんだハスの花を落とし、落ちた場所に描かれている仏が、自分の守護仏になるという話を聞いたことがあるのですが、今日の授業を聞いていると、曼荼羅の役割が仏の世界を描いたものであって、儀式用の道具として作られているわけではない感じましたが、そのような使われ方をする曼荼羅もあるのでしょうか。

目隠しをして花を投げるというのは「投華得仏」といって、灌頂という儀礼の一部です。今回の授業で灌頂も、この投華得仏も取り上げます。マンダラが仏の世界を表していることと、マンダラを前にして、僧が灌頂を受けることは、密接な関係があります。すべてのマンダラが灌頂のためであるということではないのですが、灌頂をおこなうためには、マンダラが必ず必要です。

題が「マンダラとは何か」だったので、各仏の説明や配置をあつかうのかと思っていましたが、視点、描き方、枠、構造の話でした。このような見方の方が、秩序を大事にするインド（どこでも秩序は大事にすると思うのですが、とくに）で生まれた図像にふさわしい気がします。チベットのマンダラは、外側が円で囲まれていますが、日本のものでは失われているのは、日本では、この構造は重視されなかったのですか。

たしかに、ふつう「マンダラとは何か」とあれば、マンダラの種類を紹介し、それぞれのマンダラがどのような仏を含んでいるかという説明が予想されます。そして、その多くの場合、マンダラそのものの説明は、例の「仮の世界図」「悟りの境地を表した絵図」というだけです。世の中にはそのようなマンダラの本がいくらでもありますが、仏の名前と位置をどれだけたくさん知っても、「マンダラとは何か」に答えることはできません。秩序を大事にするというのは、もちろん、どの文化でも重要ですが、その秩序をどのように表すかは、やはり異なります。たしかに、インドでは幾何学的な図形が、秩序にもっともふさわしいイメージだったようです。日本のマンダラで外側の円が失われてしまうのは、そのようなイメージが、秩序と結びついていなかったからでしょう。なお、インドの文献では、「マンダラ」という語の指す範囲が、全体の円ではなく、仏の住む楼閣だけの場合があります。インドでも、外周部を重視しない立場があったようです。

富山出身なので、マンダラについては少し聞いたことがあります。宇宙を表していて、中央に須弥山があるということだけ聞いたことがありました、建物の話ははじめて聞きました。日本のマンダラしか見たことがなかったので、そこは納得できたんですが、山はどこへ行ったんですか。

富山は日本で有数の「マンダラ立県」のところです。立山曼荼羅が伝えられたからでしょうが、そのおかげで、たとえば立山博物館では、チベットのさまざまなマンダラが収集されました。利賀村（旧名です）には瞑想の郷などの施設があり、チベット系ネパール人の描いたマンダラの壁画があります。須弥山はチベットのマンダラにも、日本の金剛界や胎蔵界の曼荼羅にもちゃんとあります。仏たちの住む楼閣が正方形なのは、須弥山の頂上に立つ帝釈天の王宮がモデルになっているからです。須弥山の山頂はきれいな正方形です。立山曼荼羅に描かれた山は、須弥山という理想的な世界の想像上の山ではなく、現実の世界の立山連峰がモデルになっています。同じ「山」でも、インドと日本ではまったく異なるのです。そして、日本の場合の山は、須弥山のような世界の中心軸ではなく、われわれの世界の外にある異界や死者の国、あるいはそれらとわれわれの世界を隔てる境界の役割を果たしています。

7月5日の授業への質問・回答

やはり灌頂についてがよくわかりませんでした。人間がほんとうの仏になるとはどういうことですか。逆に灌頂さえすれば、誰でも仏になれるということですか。

前回の授業への皆さん多くの感想が、「よくわからない」でした。その中の代表的なものをあげました。今回もはじめに少し補うつもりですが、そのためのまとめとして少し説明しておきます。

仏教というのは、仏の教えであると同時に、仏になるための教えもあります。キリスト教やユダヤ教で、神になるとは言いませんが、仏教の場合、究極の目標はすべてのものの解脱です。解脱するというのは仏になるということです。灌頂とは密教のもっとも重要な儀式で、密教の基本的な修行を終えた弟子が、師（阿闍梨といいます）から受けるものです。そのため、入門儀礼とか、資格授与の儀礼と説明されることがあります、実質的には「仏になる儀礼」なのです。つまり、仏教の目標を実現することになります。ただし、ほんとうに仏になってしまったのでは、そのあとの修行や人々に仏教を伝えることができません。そこで、実際の仏になる一步手前でとどめます。「仏になることを確実にする儀礼」なのです。その構図は、現国王が次期国王を決定する立太子の式に一致します。つまり、現国王が阿闍梨で、次期国王が弟子です。また、そのモデルとして釈迦がいます。釈迦自身が皇太子でしたし、釈迦が悟りを開いて、法を説くことと、王が国を支配することに重ね合わせることは、これまで繰り返し述べてきたことです。

灌頂の儀式の主要な部分は、仏の智慧を象徴する水を弟子にそそぐ、マンダラを弟子に見せる、弟子の目を開く、仏が法を説くことを弟子に演じさせるなどです。智慧が注がれることによって、弟子は仏になります、自分を中心としたマンダラを目の当たりにします。そのためにマンダラはすでに弟子の目の前に準備されているのです。そして、仏になった自覚（正確には、仏になりうるという自覚）を得た弟子は、実際に仏のすべきこと、すなわち説法を儀礼的に行います。マンダラを作る儀礼の中で、釈迦の降魔成道のモチーフが現れたことも、これに関係します。マンダラを作つて儀礼を行うことは、釈迦が降魔と成道のあと、説法をすることがモデルになるからです。

どうして、家が問題になるのかも、よくわからないという意見も多かったです。前から問題にしているように、宇宙とか仏の世界というのは、表現不可能です。しかし、それを人間は何らかの形で表します。仏塔はその代表でした。宇宙を表すためにしばしば用いられたのが「家」です。たとえば、キリスト教では教会は「神の家」とも呼ばれます。地上に出現した「神の世界」が教会です。インドのヒンドゥー教の寺院も同様です。われわれの家であっても、それは少なからず意識されていて、家を建てるためにさまざまな手続きを行うことや、家を建てるときに方角や部屋の配置が、科学的にではなく、宗教的な理由で決められることがあげられます。そのため、建築儀礼にはしばしば「宇宙の創造」を模したプロセスがあらわれるのです（釈迦の降魔成道も、それまでの混沌の世界に、仏が出現するという、仏教版の創世記です）。それと同時に、仏教のコスモロジーでは、世界の中心に須弥山があり、それを真上から見たのがマンダラで、須弥山頂の帝釈天の王宮がそのモデルになっています。帝釈天とは、神々の「王」であり、その主人が帝釈天から仏に変わっているのですが、ここでも「王と仏のイメージの重ね合わせ」が読み取れます。

家についての別の説明としては、人は何かに包まれたとき、それを「全体」と感じるのではないでしょうか。そのもっとも原始的な感覚は、母親の胎内にいたときに植え付けられたのかもしれません。母胎回帰本能です。灌頂儀礼が仏として「生まれ変わる」時に、家に入るのは、灌頂が再生儀礼でもあるからなのです。

マンダラが弟子に仏をおろす儀礼の道具なのだと聞き、とても驚いた。今回、疑問に思ったことは、弟子がマンダラの中央に描かれた仏になるということは、一枚のマンダラはひとりにしか使えないということですか。また、はじめのマンダラばかりのスライドで、まわりの仏たちが、中央の仏をむいてないものもあったのですが、そのマンダラは儀礼用でないということですか。

すべてのマンダラが儀礼の道具というわけではありませんが、インドやチベットの砂曼ダラや、日本の敷曼荼羅はそうです。チベットの場合、前回のはじめにお見せしたように、絵画形式のマンダラや、壁画のマンダラがあります。その多くは礼拝や、寺院内の装飾のためのマンダラですが、マンダラが「仮の世界」であるということは、儀礼の文脈でとらえるのがもっとも妥当だと思います。絵画や壁画のマンダラの場合、まわりの仏が中央にむかず、すべて同じ方向を向いているものもあります。歴史的には、その方が古いという研究者もいますし、ラダックのような古い時代のマンダラにあらわれるので、おそらくそうなのでしょう。しかし、水平の地面の上の砂曼ダラや敷曼荼羅に見られる表現に、マンダラが儀礼の装置として用いられるための工夫が見て取れると思います。このほか、マンダラの機能としては、密教の僧侶が仮の瞑想をするときのイメージとして用いられたり、日本密教では修法（しゅほう）と呼ばれるさまざまな儀礼の本尊として用いられたりします。しかし、いずれの場合も、それが仮の世界の模式図で、そこに仏を呼び寄せる（降臨させる）ための役割を果たします。一種の「よりしろ」のようなものなのです。その点で、灌頂での機能と何ら違いはありません。なお、灌頂は多くの場合、複数の弟子が順番に受けます。そして、全体が終了すると、インドやチベットではマンダラ（砂曼ダラ）は完全に壊してしまいます。

チベットのマンダラに描かれる仏は「女性」の姿が強調されていた。女性=生命=仮というイメージがあるのだろうか。また、マンダラのスライドの三角形（注：胎蔵曼荼羅の遍智院の中央の一切如来智印）というシンボルは何を表したものですか。

マンダラに描かれる女性の仏が、「女性であること」を強調して描かれているのは、インドやチベットの女性のイメージが、われわれのそれとは異なるからでしょう。それは、中国や日本の理想的な女性像にくらべて、より官能的に表されます。乳房や臀部を強調したり、逆に、ウェストを極端なまでにくびれさせます。女性=生命=仮というイメージは、私の授業ではしばしば強調してきた「公式」ですが、マンダラの個々の仏には当てはまらないでしょう。むしろ、宇宙全体がハスでイメージされていることで、それはまとめて表していると思います。胎蔵曼荼羅の三角形は一切如来智印と呼ばれ、その名の通り、すべての如来の智のシンボルです。チベットの伝統では、あらゆるものを生み出す源とも言われています。チベットの胎蔵マンダラでは、天地が逆で、逆三角形になっています。

王が王子に王権を継承するときには、マンダラに当たるものはあったんですか。

インドの国王即位儀礼や立太子の儀式には、マンダラはありませんでした。それとは別のさまざまな道具で、王権の正統性や、王としての資格の授与を、儀式の中で演出しました。そのほとんどは、密教の灌頂と共に通しないものですが、唯一、共通なのは、灌頂という名称そのものである、王への灌水です。密教の入門的な本には、ほとんどすべて「灌頂の起源は古代インドの国王即位儀礼」と書いてあります。しかし、実際のヴェーダ文献などを見ても、密教の灌頂のモデルとなるような即位儀礼はまったく見つかりません（通説というのは、このようにいい加減なものです）。そのため、私は国王即位儀礼は密教の灌頂の「理性的なモデル」であっても、その具体的な起源ではないといっています。むしろ、密教の灌頂に近い儀礼は、仏教でもヒンドゥー教でも行っていた「仏像（神像）の完成式」です。

「マンダラを壊す」ということが気になります。宇宙を破壊するということですね。前に聞いた世界の終わりということですか。

「マンダラを壊す」ことを日本密教では「破壊」と言いますが、日本では敷曼荼羅をくるくる巻いておしまいです。それに対して、チベットでは砂曼ダラを完全に壊して、その砂は川に流してしまいます。このことは、インドの文献でも確認できるので、インドですでに行われていました。「宇宙を壊す」ことですが、それは地上に出現した仮の「仮の世界」を壊すことです（コスマロジーの世界の終わりとは異なります）。これは、マンダラ制作儀礼とセットになります。わざわざマンダラを作る儀礼が定められていることを説明しましたが、マンダラを作るということは、このわれわれの世界（俗なる世界）に、私たちの「聖なる世界」を出現させることです。そこでは、われわれの現実の世界はいわば「虚構の世界」で、私たちの世界こそが「真実の世界」になります。逆に思うかもしれません、宗教とか儀礼というものは、そういうものなのです。しかし、儀礼が終われば、われわれは日常の現実の世界に戻らなければなりません。そこに、まったくレベルの異なる「真実の世界」がいつまでもあっては困ります。それに、つぎにマンダラを作るときに、あたらしく「世界の創造」ができなくなります。おそらく「なんてムダなことを」と思うでしょうが、それだからこそ、儀礼であり、宗教なのです。

仏像に目を入れるのは、魂を入れるためというお話をしたが、願い事が叶ったときに、ダルマに目玉を描き入れるのはなぜですか。弟子が灌頂の儀式を受けた瞬間、家の主となり、中心にいるということを自覚しなければいけないという説明があったが、その場で、弟子は今までの世界と違うものが見えるのだろうなあと思った。輪宝、法螺貝など、儀礼後にまた儀式みたいなものがあるのがおもしろかった。

仏像の開眼供養や灌頂では、目を入れると言うよりも、目を開かせるという儀式です。でも、東大寺の大仏の開眼供養は、大きな筆で目を描くという作法をしたともいって、目玉を描くようなイメージがあつたかもしれません。選挙などでダルマに目を描くのが、いつ頃からはじまったのかはわかりませんが、どこか、共通するところはあるような気がします。目玉が入るということは、そのダルマが、突然リアルな存在になるようです。それまでのダルマが単なる丸い物体であったのが、生気が通った存在になるのでしょうか。灌頂での弟子の体験は、おそらく、コメントにあるとおりでしょう。もちろん、そのような感動や衝撃を受けない人もいるでしょうが、それも儀式なのですから、当然でしょう。儀礼とか儀式というものはそういうものです。輪宝や法螺貝を与える部分も、灌頂の儀式の一部です。灌頂とは弟子への灌水を中心とした長大な儀礼の総合的な名称としても用いられます。中心の儀礼の名称が、全体を指しているのです。

家を建てるところに種を植えたら、家ができるという発想がとてもおもしろいと思いました。しかし、宝石も埋めることがあると聞き、もったいないなあと感じました。マンダラの儀礼のことですが、仏をひっぱってきて、に入れたり、マンダラを見て「私の家がここにある」と感じるのは、正直、無理があるのではないかと思いました。本当に弟子は思っているのでしょうか。私には信じられないなあと感じました。家を建てる前の地面に、五種の穀物（五穀）、五種の宝、五種の薬草を埋めるというのは、インドの建築儀礼で古くから行われたようで、その影響を受けた東南アジアや、中国、日本でも行われました。今でも、古い寺院の発掘を行うと、このような出土品があるそうです。授業では大地の女神への受胎という説明をしましたが、これも一種の宇宙創造です。五種のこれらもので、世界の構成物を象徴させ、それを基礎に置くことで、建造物に宇宙的なイメージを与えたのです。ヒンドゥー教の建築儀礼では、地面に深い穴を掘って、ナーガや亀の置物を埋めることもあるそうです。世界全体を支えるナーガや亀なのです。「仏

を引っぱってきて、人に入れる」のが「ウソっぽい」と感じるのはもちろんわかりますが、密教の儀礼というものは、多くの場合、それが実際に行われます。儀礼の場に仏を招き、その仏とコミュニケーションをしたり、さらには、自分自身がその仏と同一であるという体験を行います（入我我入〔にゅうががにゅう〕といいます）。平安時代の密教の加持祈祷というのを、日本史や平安時代の文学で知っているかもしれません、そのほとんどが、密教の僧による、このような「仏との協同作業」なのです。そのための「よりしろ」がマンダラです。

儀礼の時の結界で、仏をコントロールすると言っていましたが、仏はコントロールされる存在であってよいのでしょうか。釈迦（太子）が仏（現国王）になるとき、水によって仏になる（新しい仏を生み出す）と言っていましたが、私たちは、普段何気なく水を飲んでいますし、生活においてなくてはならないものです。当時の人たちは、水を聖なるものとしてみていたのですか。もしそうなら、どのようにあつかっていたのでしょうか。簡単にはあつかえないですよね。

はじめの質問への回答は、上記の通りです。水については、インドの古くからの「水への信仰」といったものが重要です。水をわれわれは単なる物質と思っていますが、インドでは「命ある水」と「物質の水」という2種がありました。これは、インド=ヨーロッパの言語で広く見られるそうで、水を神聖視するのはインドに限らないようです。宗教儀礼で用いられる水というのも単なる物質ではなく、この「命ある水」言い換えれば「聖なる水」です。キリスト教にも洗礼という水を用いた儀礼がありますよね（洗礼に言及してくれたコメントも数人いました）。もちろん「命ある水」が、われわれの知っている「物質としての水」と別に存在するわけではありませんが、宗教的な場面では、水がそのようなものに「変質」するのです。その方法は、やはり儀礼の中で、何らかのプロセスを経ることで行われます。たとえば、灌頂儀礼では灌頂瓶の中に入れた水に、対応する仏を溶け込ませるというプロセスがあります。日本でも東大寺二月堂の「お水取り」という、水を中心とした儀式がありますが、そこでも水は特別な存在です。ついでに言えば、インド=ヨーロッパ語族で、水と並んで、「命のあるもの」と「命のないもの」の2種があるのは火です。火も水も特別な物質（生き物？）なのです。

人は目隠しをすると恐怖心が増すと聞いた。儀式で目を隠すのは、周りが見えていない状態で、音声だけ聞こえる中で、感情が高ぶり、その過程の中で、意識して開眼したときに、世界が変わって見える・・・とか？

そうなのでしょう。目隠しについては授業では説明しませんでしたが、灌頂の儀式のはじめから、弟子は目隠しをされていて、儀式の半ばで取り外されます。そのときに弟子の目の前にはマンダラが広がっています。おそらくそれは、もっとも効果的な「仏の世界との出会い」なのでしょう。このときに、阿闍梨はマンダラについて弟子に説明をします。そして、順次、灌水、開眼、法輪やほら貝の授与などが進んでいきます。次第に仏としての自覚が備わっていくのでしょう。

7月12日の授業への質問・回答

あまり関係はないけれど、この前、他の授業でチベットに関する映画を見ました。ダライラマがいる僧院が出てくるんですが、砂曼ダラらしきものが出てきて、とても美しいと思いました。あれを作るのには、相当な努力と繊細な技術がいることを実感しました。しかし、それを中国の軍部の高官たちが踏みつけていました。それを見て、悲しく感じるとともに、憤りを感じました。僧たちが歓迎のしるしとして心を込めて作ったマンダラには、命のようなものが吹き込まれていてそのほどで、大事なものなのに、それを踏みつけることは、たいへんな侮辱だと思いました。壊すべくして壊したものではないから、僧にとってはプライドがすごく傷つけられたんじゃないかなと思った。

『セブンイヤーズ・インチベット』の冒頭のシーンですね。私は見ていないのですが、砂曼ダラを授業で取り上げると、よく、この映画のことをコメントで紹介してくれます。チベットというと、辺境の地で文化果てるところというイメージが強いのですが、仏教に関しては、飛び抜けて高いレベルを持っていました。インドの仏教のもっともオーソドックスなところが、そのまま伝わっています。それにくらべれば、中国や日本の仏教はひどくかたよったものです。授業のはじめの頃にやったクイズでも紹介しましたが、インドの仏教文献をもっとも大量に翻訳したのもチベットでした。しかし、現在のチベットにはその伝統がほとんど失われています。1959年以降、中国がチベットに侵攻し、多くの文化財が破壊され、僧侶たちも殺されました。文化大革命の時期にも、さらに徹底した破壊と殺戮が行われました。チベットでの人権抑圧は、現在でも顕著で、欧米では中国といえば人権問題とつねに結びつけられて語られます。日本ではチベットにおけるこのような人権問題が、マスコミなどで大きく取り上げられることはほとんどありません。ダライラマが国賓として招かれることもあり得ません。中国との関係に波風を立てたくないのでしょうか。欧米ではチベット仏教は「生きた仏教」であり、多くの信奉者を集めています。有名なところでは、俳優のリチャード・ギアも熱心なチベット仏教徒で、しばしばダライラマをアメリカに招いています。アメリカで『セブンイヤーズ・インチベット』のような映画が作られるのも、このような背景があるようです。

ヒンドゥー教は民間信仰から生まれただけあって、本当にたくさんの神がいるなあと思いました。仏教の神々と共に通するものが多いとわかりました。シヴァが生首を首にぶら下げていましたが、それは何のためですか。ちょっと怖いですね。どこの国の宗教にも、死を司る神がいました。死は恐ろしいものではありますが、当時の人々は、その神を信仰することで、うまく死とつきあっていたのだなと思いました。

ヒンドゥー教が民間信仰の要素を多く含んでいるのはたしかですが、それだけではありません。むしろ、オーソドックスなヴェーダの宗教を母胎に、民間信仰を含むさまざまな要素を取り入れることで、裾野を広げた宗教です。シヴァが首に懸ける生首の環が気になるというコメントが何人か見られました。シヴァは基本が「畏怖すべき神」で、死や破壊と密接に結びついています。その一方で、好色で、妻のパールヴァティーとの愛が語られる神話も多くあります。私が好んで用いる「生と死が同居する」神の典型です。生首の他にも腰巻きとして、何十本もの腕を連ねて腰にぶら下げて描かれることもあります。シヴァの体の色が青黒いのは、もともとアーリア人の神ではなく、インド土着の神がその起源であったことを示しています。ヴィシュヌの化身のクリシュナも、体の色が黒く、同様に言われます。死と信仰はそのとおりで、人間に死がある限り、宗教は永遠に存在します。文明の発達や科学技術の進歩などで、宗教などは無くなると考える人もいるかもしれません、そんなことは絶対にありえないのです。人生は不合理なもので満

ちあふれています。死はその最たるものです。

「密教美術の世界 俯瞰図」は、項目が多くとても複雑に見える。世界とは何か。私たちの世界、須弥山世界観、世界と自己は、全部「世界」でくくれないのでしょうか。ガネーシャは四臂で4つのシンボルをそれぞれ持っていますが、それぞれ何を表現しているのですか。

俯瞰図は授業でとりあげた項目やキーワードを、ある程度まとまりを持たせながらならべたものです。抜けているものもあると思いますし、別のつなげ方もあるはずです。皆さん自身でも、試みてください。「世界とは何か」以下のものを「世界」でくくっても、もちろんいいでしょう。このあたりのことをまとめて「世界とは何か」でとらえられるでしょう。そして、その対極に「私とは何か」という問いがあります。世界を問うことは、自己を問うことでもあります。そして、自己とは何かという問いは、「人間とは何か」と問うことです。前回の授業のまとめで強調したのも、そのようなことです。ガネーシャの持物は、前回のスライドでは斧、蓮華、数珠、鉤でした。一般にはモーダカという菓子を持つことが多いです。日本の聖天では大根を持つものを見ます。それぞの持物の意味はよくわかりません。

作って維持して壊す、また作って維持して壊す。この繰り返しには終わりはあるのですか？もしあるとしたら、どうなった時にですか。ないとしたら、完成はしないってことですか。

終わりはないでしょう。それは「完成しない」ということではなく、それすでに完成しているのです。世界がこのようなサイクルを持つことの意味や目的は、宗派や立場でいろいろですが、有名なものでは「遊び」(lila) というものがあります。世界の創造や破壊は、神の「遊戯」なのです。子どもが積み木で町や建物を造り、それを壊すようなものでしょう。われわれにとっては、ひどく迷惑な遊びです。日本人にはおよそ思いつかない「目的」ではないでしょうか。

今までの授業すべてが、まさにマンダラについて学んだことで、集約された。仏教の目的は悟りを開くことで、それにより、宇宙と根源から一体となること。マンダラとはそのイメージを持たせるための儀礼的アイテムとして用いられていると思う。さまざまな尊格のイメージをスライドで見たが、家族や仲間を持つものが多いことに気付いた。これは、ひとつの有力な尊格の偉大なイメージを、他の尊格へと拡大させることにねらいがあるように思えた。また、人間にとて、もっとも不思議で理解しにくい生と死についてのイメージが、多くの尊格に宿っている。これは、こうした難解なことを尊格によって説明づけることで、人々の信仰を集めるといった考えからだろうか。しかし、インドは複雑だ・・・。

いずれのコメントも、もっともだと思います。マンダラがまとめになっているというのもそのとおりです。逆に言えば、マンダラを理解するためには、少なくとも、これだけのことを知ていなければならないということです。ヒンドゥー教の有力な神が、他の神々にイメージを拡大させるというのは、ローカルな神にとっては、有力な神と結びつくことで、汎インド的な神々の体系に、つながりを持つことでもあります。人類学者や歴史学者は、このようなインドのメカニズムを「大伝統と小伝統」と呼ぶことがあります。地域ごとの小さな伝統が、全国規模の大きな伝統と結びつく現象が、神々のイメージや体系の他にもいろいろ見られます。

やっと、教科書の内容が出てきた授業になりましたね。最後の神や仏どうしのつながりは、あまりにも複雑で、どうしてもこんがらがってしまいますね。すべてがつながって、全体を眺めたときに見えるものが、とてもおもしろいと思います。

これまでの授業の内容が、教科書と対応していないくて、不思議に思っていた人も多いでしょう。じつは、

マンダラについてもそうですが、授業でこれまで取り上げたことを前提にして、教科書を読むと、さらに内容がよく理解できるはずです。ここから教科書の内容がはじまるのです。それとともに、授業でとりあげた内容は、私の別の著作『マンダラの密教儀礼』にも含まれています。さらに、近著『生と死からはじめるマンダラ入門』も、多くの部分が重なっています。1冊の教科書で半期の授業ですが、その内容は、通常の授業の3つ分ぐらい、盛りだくさんなのです（と、私は思っています）。

今日の授業のように、広い範囲のさまざまな神のイメージを見ていると、それぞれのイメージの拡大や伝わりや変化に興味は尽きないが、しかし、伝わっていく地域に、その神々のイメージを受け入れる元のイメージがあるように思う。類似したイメージが多くの地域に見られることは、住んでいる環境に影響を受けない、人類共通の感覚、感性があつたりするのでしょうか。

私もイメージの伝播と変容に、昔から興味があったので、そのようなことをよく考えていました。アジアでは仏教のイメージの伝播が、そのような格好の例となります。教科書の『インド密教の仏たち』や『仏のイメージを読む』もそのような視点から書いたものです。イメージが伝播する地域に、すでに類似のイメージが存在することもありますが、当然、存在しない場合もあります。存在しない場合であっても、イメージが伝播することもあります。イメージが伝播するときに、意図的にイメージが改変されることもあります。異なる文化圏をイメージが伝播するときには、さまざまなパターンがあるのです。その一方で、人類普遍的なイメージがあることも事実です。ユングやエリアーデなどは、このようなイメージを「元型」と呼んだり、「聖なるもの」と呼んだりします。そのようなものを研究するのもおもしろいのですが、ユングやエリアーデぐらいの巨人でなければ、陳腐な研究で終わってしまうおそれもあります。なかなか難しいところです。

ヒンドゥー教の神々のイメージは、密教の仏に比べて、少しグロテスクな印象を受けました。よく言えば「生き生きしている」のかもしれません。「形式化」する前の仏たちの躍動を感じました。

たしかにそうだと思います。それと同時に、「生き生きしているもの」がグロテスクで気持ち悪いという指摘もおもしろいです。人形などでもそうですが、あまりにリアルな表現は、見る人に美しさや精妙さを感じさせるよりも、気味悪さを感じさせるようです。ろう人形もそうですね。人間が美を感じるのは、本物そっくりのリアルなものよりも、何らかの形式にしたがって変形したもので、その形式を通して、美しいと思うのかもしれません。以前の授業では、形式性と写実性を対比させ、宗教美術は形式性に重点が置かれると言いましたが、それにグロテスクさや気味の悪さを加えると、さらにおもしろい視点が可能になります。ヒンドゥー教が一般に「生き生きしている」のは、インドのお寺や遺跡に行けば実感できます。エローラ石窟のように、ヒンドゥー教と仏教の両方の石窟があるところに行くと、圧倒的にヒンドゥー教の方が見応えがあり、おもしろいです。私のHPでもヒンドゥー教の寺院の写真をたくさん公開していますので、ゆっくり見てください。グロテスクなものもときどきあります。

シヴァの首飾りが生首というイメージは、どこから生まれてきたのだろうと思うほど、ぴったりだと感じました。また、時間、黒、死を同じ感覚で使っていることを知り、時間と死の関係について考えさせされました。今日の授業で、聖なる範囲は、一時的なものであるからこそ、聖なるものであり、マンダラをこわすというのは大切なことだと思った。人間も花もマンダラも、いずれはなくなってしまうからこそ美しいんだなと思いました。

聖なるものは一時的ではかないものというのは、授業で強調したことです。それとともに、マンダラの場合は、とくに儀礼の場や装置であることが重要です。単に世のはかなさや無常を示すのではなく、われわ

れの日常的な空間に、神々の領域をむりやり出現させたのがマンダラで、それは儀礼があるから準備されるのです。聖なる領域が永遠に存在するのは、われわれが日常生活を送るうえでは不都合です（そんなものがまわりにあったら、落ち着いて生活できません）。それに、聖なる領域を作ることも儀礼の一部であるからには、聖なる領域が存在しない状態に戻しておかないと、儀礼がはじめられません。はかなさや無常観から美を感じるのは日本人にとって普通なのですが、インドでマンダラや神々の像を造った人々は、それとは違うレベルで、聖なるものを意識していたような気がします。

今日の内容とは関係ないですが、この授業のたびに、仏像の実物を見に行きたくなります。

ぜひ、見に行ってください。金沢では石川県立歴史博物館で、7月21日から「白山——聖地へのまなざし」という特別展があります。白峰村にある白山下山仏の十一面觀音立像（金銅仏）や、白山ひめ神社の白山三社権現像がチラシには載っていました。白山は北陸の重要な信仰の拠点ですが、地元ならではのなかなか充実した展覧会のようです。そのほか、東京国立博物館は「仏像の道」、京都国立博物館は「大覚寺の美術」、奈良国立博物館は「院政期の美術」がこの夏の特別展です。帰省などで近くに行ったら、のぞいてみてください。どこも佛教美術を取り上げるようです。ブームなのですね。

7月19日の授業へのコメントと質問

ときどき、わからないこともあったけど、最後はぐんぐん知識が集まっていって、ギュインと発展していくのが楽しかった。

密教美術という限定されたテーマから、世界の宗教との対比や宇宙にまで話が広がっていくことに学問のおもしろさを感じた。また、仏教というか、宗教それ単一で存在するものではなく、他の宗教と結びつき、影響しあって存在しているのだと知れた。

授業でも言わっていましたが、宇宙の話が終わった後は、授業が進むのが早かったです。解釈されて生まれた意味は教わりましたが、それでも再認識することはできなかったので、試験前に資料を見直して驚くような体験をしてみたいです。今日の授業では、踏まれていても、それが敵対しているわけではなく、支えているのだということが意外でおもしろかったと思います。

仏教において母と子の結びつきが強いのはなぜか不思議に思った。教科書を読んでおくと、先生の言っていることが何となくわかっておもしろいです。今日で授業が終わるのは、なんか寂しい感じがしますね。夏休みに機会があったら、仏像を見に行きたいです。

この授業で耳にするまで、ヒンドゥー教と仏教がこんなに密接に関係しているとは思いもよませんでした。先日、甲斐の善光寺に行った際、文殊菩薩の像を見ましたが、京都や奈良で文殊を知らずに見ていたときと異なり、多生なりとも理解を持った上で見たときの方が、断然、感動や印象が大きいと感じました。

今日は授業最終日でした。すこし難しい科目だったけど、終わるのがさみしいです。今まで思っていた仏教に対してのかたいイメージが、すこしほぐれました。最初の方で、仏教とヒンドゥー教との相関図のようなものを見て、これほどのつながりがあるのかと思った。仏教もヒンドゥー教もお互いに他をよせつけないようにしていると思っていた。とくに、ヒンドゥー教は厳しいと思っていたけど、人々にとって見れば、信仰の対象とする神のイメージは似ているのかなと思った。

足に踏んでいるということが、出身母体を表すということに驚いた。

日本のイメージだと、足の下に踏むというものはよくないことだけれど、仏教内では従属が出身を表すというのに驚いた。

以前より、仏教や宗教の神仏について、断片的な知識は持っていたものの、今期の講義を通じて、それらがようやく線で結ばれた気がする。とても興味深い講義だった。

授業とても楽しかったです。いつか現地へ行って、実物を見てみたいなあと思いました。テストがんばります。

本当に後半はあっという間でした。3ヶ月間どうもありがとうございました。

密教美術は宗教としてだけではなく、美術としてすばらしい作品を残していると思った。まさに美術です。これからは仏像をじっくり見ることができそうな気がします。

まだわからないことだらけだけど、テストにむけてしっかり勉強しておきたい。下から支える人も大切だとわかった。

足の下や座に置かれるものが敵対者ではないといつても、今の世の中でそんなことしたら、確実に敵対者だと思う。これから先、一度は仏像を見てみたいと思います。

来週のテストでは、自分の考えを述べられると思います。

自分の考えでは、足の下に人物が来た場合、踏みつけられるという悪いイメージしかないが、今回のスライドで見たように、従者を表していると知って意外だった。

先生が最後に言っていたように、たしかに、ただ漠然と見ていた最初とは違って、いろいろな部分を意識してみるようになりました。

この授業は変わった授業だったなと思います。板書はほとんどせず、スライドで美術品を見て、その後、教授からのお話、問い合わせについて考える。なかなかすっきりはいかなかったですけれど。ひたすら板書する授業より難しい授業でした。でも嫌いでなかったです。

今まで仏像を見て来て、仏像に細かいきまりがあって、それに沿って作っているというのが一番の驚きました。

講義の内容でないのですが、今日の暑さはかなりひどいものでした。踏みつけられている=しいたげられているというイメージがあるけれど、そうでなく、支えているという意味があるのが、意外でした。意味がわかると、形が違って見えるというのには、大いに納得できました。

マンダラの構造がよくわかりました。仏教はいろいろな別の宗教と結びついているなと思いました。昔の人が残した文献、仏像が、現在にまで伝わっていることに感動しました。マンダラの仏の世界を、本当にうまく表しているなあと思いました。

今日はヒンドゥー教の神々を見て、足の下にあるものは「敵対者ではない」ということがよくわかりました。前、本で読んだときはよくわかりませんでしたが、実際の作品を見ると、ヒンドゥー教は出身など、身分を大切にしていることがわかった。マンダラも外から見ると、内から見ると、世界観が全然変わってくると思った。

ものごとを考察するとき、その意味を知ったら、そのものごとに対する見方が変化するのと同じように、哲学をしっかり勉強したら、生き方もきっともっと変わると思った。それがよく生きるということかもしれません。

れないと思う。主題とそれでごめんなさい。

「征圧」ではなくて、踏まれている対象が下から支えているというのは、とても興味深かったです。後半は難しくてよくわかりませんでした。が、興味はわきました。

今までの講義の中で、この仏像はどんなイメージから作られているのか、シンボルは・・・といったことを考えてばかりでしたが、今日、それで終わりでなくて、何が密教美術を生んだかを考えてみて、密教美術の背景には人間がいることに気付きました。仏と人間はとても離れた位置にいると思っていましたが、案外、身近な存在なのかもしれないと思いました。

最初の方の授業では、「この仏はこういう意味を持っている」と言われると、なるほどと思い、すぐに納得していたけれども、最近は、そういうことを言われても、何か違和感があり、少し違うのではないかと感じることが多くあるようになった。それは、自分の考え方が全然違うのかなって思って不安だったけれど、再認識だということがわかって、安心した。

マンダラは、インドの視点ではまわりからも見ないといけない、というのは、なかなか興味深い。真ん中が一番大きく描かれ目に付きやすいので、まわりはあまり気にかけなさそうだが、やはり、描かれている以上、無駄ではないということなのだろう。全体的に理解できたかと言われると、自分の感性と違ったりして、あまり自信はない。しかし、興味深い解釈だと、内容だったので、楽しめた。

見えていても形と意味は異なっていて、解釈→再認識の作業は重要だったんだと思いました。

これまでの授業でたくさんの仏教の美術作品を見てきましたが、こんなに数多くあるとは知らなかったので、とても驚きました。今までは、歴史の授業でこし見るくらいだったので。また、この用紙を書くために、授業を聞きながら疑問に思うことを探すようになって、それが習慣になって、他の授業でも疑問点を探すようになったのは、よかったです。

仏教とヒンドゥー教、またその他の神々のイメージ等でつながっているんだなあとあらためて思いました。また、踏まれているものは、必ずしも苦しんでいないことに驚きました。「踏まれている=しいたげられている」というイメージがあったので。思いこんでいてはいけないと思いました。思いこみはいけない、というか、別の見方も考えなければならないと、この授業を受けて思いました。

すごく流れが遅かったように感じた。

ヒンドゥー教と仏教には、共有するところがあるのが興味深いと思いました。やっぱり、大陸がつながっていたし、旅人や商人が行き来するうちに、お互いを認め合ったのかなあと思いました。今でも宗教間の対立で、戦争が起こっているのに・・・って思いました。

ヒンドゥー教や仏教が密接につながっていることを知って、驚きました。おもしろいなあ。人間って、とても深いなあ。

仏教の世界はかなり入り組んだ関係になっていますが、その中で、設定上の矛盾は生まれなかったのかと思います。

自分の思考能力の低さか、もしくは素直さか、スライドを見ても、何も思えないことが、しばしばいらだたしかった。

前期の分のこの講義を取っていて、正直、あまり、インド密教に詳しくなれなかったと思う。けれど、けっこう楽しかったのでよかった。

踏まれていることが征圧を意味しているのではなく、上を支えていることに、仏教の世界観を感じました。最初の頃はよくわかりませんでしたが、途中から、仏像が表していることが見えるようになりました。

今までの講義を通して、仏教と密教には、共通点がいくつもあると思った。

神が神を支えているのが変だと思った。踏まれていやじゃない人間はいるはずがない。

別の授業でも「マンダラ」が出てきたことがあり、そのときに、すごく理解しやすかった。はじめはまったく意味がわからなかったけど、何度か見ているうちに、何となく前よりわかった気がすることがあった。再認識できてたと思う。

足の下に置かれたもの、踏みつけられているものは、敵対者ではなく、それぞれに意味があることがわかった。授業は全体を通して、自分には難しかった。とくに最後らへんは言っていることが理解できないものもあった。

踏まれているヤクシャが、じつは支えているなんて驚いた。無理やり踏まれているイメージしかなかったから、本当に手でさえられている像を見たときはびっくりした。これから、足の下にいる仏像を見る目が変わりそうです。

足の下に踏んづけられているのは征圧されていると思っていた。しかし、よく見ると苦しんだ表情をしていなくて、上のものを支えているんだとはじめて知った。これから、仏像を見る機会があったら、このような細部やその仮の背景にあるものを意識してみたいと思った。

神が別の神を踏みつけるというのは、インドの法則に従っていないと言っていましたが、取り壊す運動はなかったのかなあと思いました。

「意味から形が浮かび上がる」というのはなるほどと思った。思考というのは視覚も支配しているのだと思う（心理でやった気が・・・）。別に何か言いたいということはないけれど・・・。双方向なベクトルは理解できる。

仏教の仮とヒンドゥー教の神は、多くのイメージを共有していることに驚いた。この授業を受けて、全体的に内容が難しいと感じた。

美術館の絵画やその他の作品も、その作品の時代背景や作品の説明などを理解することで、たしかにその後に再度、同じ作品を見ると、はじめに自分が思い描いていたイメージとは違った、あらたなイメージが形成されると思う。音楽でも、時間をおいてまた聴いてみると、伝えたこととが違うように思えたりする。仏教だけでなく、ヒンドゥー教やその他のマイナーな宗教との関係を読み解くことでようやく理解できるのだろうかと思った。

マンダラの中にヒンドゥー教の神々が表されているとは驚きだ。

全授業、スライドを通して勉強したのが、今までにない新しい感じでよかったです。名残惜しい感じがする。

今まで、仏像のことは全然わからなかっただし、ふれることもなかっただけれど、この授業を通して仏像に対して知識を得たり、感動したりできて、すこし世界が広がったように思う。半期間ありがとうございました（まだテストもありますが）。おつかれさまでした!!

なるほど、たしかにたとえば能や狂言なんかは、前提となる知識を持っていなければ、単なる踊りのようなものにしか見えないが、意味を知れば、そこからいろんなことがわかったり、まったく別の見方ができたりする。

はじめて密教美術にふれてから、今日までやってきて、その正体が少なからず見えたと思います。「全宇宙」＝「人」（自分）には驚きました。

なんか自分がこの授業で理解したのか、理解していないのかもわからない状態で、最後になってしまったのですが、先生のうまさかどうかはわかりませんが、すこしは興味を持つことができました。これから今、授業するときは、今のままのスタイルで、十分、大丈夫だと思います。

最初の頃はむずかしい話で、興味を持つものがすこしむずかしかったが、仏教の宇宙観のあたりから、とてもおもしろく、授業にのめり込んでいった。試験は不安だが、この講義を受けてよかったです。

ヴィシュヌとかシヴァとかはインドだと人気の神と聞いたんですが・・・。感想というか何というか（半期の）。思ったより、木の仏像って、仏教美術全体から見ると、わりかし少ないなあって。あと、もっと作品についてもっと掘り下げて語るものかと思っていたので。なんか、仏師の話をすこし期待していたので、あんまりなかったのが残念でした。

踏まれていると、どうしてもマイナスのイメージばかり出てきて、上に乗っているものを支えるとか、そこから上のものが生まれるというようには、とても考えることができない。今まで講義を受けてきて、そんなにわかった気がしないけど、最初の頃とくらべて、考え方が少し変わった気がしたのでよかったです。

仏教を美術の視点から見るということで、最初は別に美術に関しては興味がないと思ったのですが、わかりやすく、かつ広く学ぶことができたように思います。あと、寺とかに行ったときに仏像が何かわかるというのもいいですね。専門の方で、いくつか仏教関連の授業（古典学や中世史）を取っているので、役に

立ちました。イメージするのに。

四月に最初にこの授業を受けたとき「こんな話ばっか聞いとったら、頭変になるわー」とか思っていましたが、密教的な視点で世界を観るのもいいなって思えるようになりました。形と意味の関係とか、むずかしい話はよくわかりません（スイマセン）が、自分の視野はすこし広がった気がします。ありがとうございました。

足の下や座に置かれるものは敵対者でないのが、本来の意味であったのに、左足（不淨）で顔を踏みつけるようになってしまったように、形が変わったということで、仏教そのものの意味が変わってしまったと、暗に表しているとわかり、人間は変化せずには生きていけないものだと感じました。「ものごとは、見るものの視点によって違って見える」そのことがこの授業を受けて一番学んだことです。

この授業全体を通しての感想は、ものすごくたくさんの仏像を見てきたなーという感じです。今まで、社会の資料集とかに載っている小さい写真しか見たことがなかったので、スライドで大きく見れてよかったです。

マンダラにヒンドゥー教の神がいるのがおもしろいと思いました。前に見たとき、まわりは宇宙を表していましたが、今回は神なので、まわりというのは重要なのかなあと思いました。

足の下や座に置かれているのが、自分の弟子だったりしたのがおもしろいと思いました。

たくさんの仏像を見いろいろな話を聞いたけど、ここで学んだことが他の場面でも使えるといいと思いました。

もともと興味がそんなになくて、しかも授業はわからないし困ったけど、何とか全出席をすることができた。また授業以外の場面で、興味を持てたらいいと思う。

足の下に踏みついているのは、「敵対関係」だけだと思っていたが、「出自を表す」ことや、「支える」こともあるのだと聞いて、なぜかほっとしました。半期を通して、仏像というものにふれてみてきたわけだが、楽しかったが、とくに印象的だったのは、仏=宇宙=生命=私たち自身というところ。うまくは言えないが、ミクロがマクロ的な存在にとらえられるというのが新鮮だった。

前期を通して、密教美術について学んでみて思ったのは、やはり人間のすごさというか、不思議さとか、そういうものでした。最近のニュースや社会現象を見ていると、人間のいやな部分しかなかなか見て取れないのですが、こんなにすばらしいものを創造することができるのも、人間だからだと考えることができるようにになって、よかったです。

「再認識」けっこうできたと思います。一度、何気なく見ていたものを、あるテーマで集めたものと一緒に再度見せられると、その仏像の意味（？）がわかったような気になりました。マンダラを一度生で見てみたいですね。

最後の授業だったので真剣に聴いたけれども、やはりむずかしかった。でも、以前と比べると仏教について考えることが多くなり、仏像をよく見るようになりました。

昔、東大寺の四天王像を見て、邪鬼が踏まれていることに気づいたが、じつはそれはルール違反であることを知ってとても驚いた。

仏像は形ではなく、神話や象徴性などの意味を見るものだと、ようやくわかった。もっと早く気づけば、この講義をもっと楽しめたと思った。

仏像の中に、人などを踏みつけて立っている像があったが、私のイメージでは、悪いイメージがあったが、インド的には支えていて、その上の者が存在するという見方を聞いて、仏像に限らず、美術作品は、たくさんの角度から見て、作品を感じ取ることが必要だと思った。この授業を通して、今までほぼ興味がなかった仏像が、親近感がわくようになった。

たしかにひとつのものをつきつめて考えるのも大切だが、比較して相対化して考えることは、とても大切であると思った。その上で見えてくるものは多くあると思う。宗教学Bは正直、多少の好奇心でとった授業だったけど、すごく意義があったと思います。ありがとうございました。

シヴァとパールヴァティーを踏みつけている像の解釈、今まで占領や戒めのような意味しか目に映りませんでしたが、出自や所属を表していると聞いて、なるほどそうだなと思いました。この講義で使われたスライドには、今まで自分が趣味等で見たことがある図も多くありましたが、講義を受け、新しい解釈を学んだ後で、それまでは目に映ってはいたけど、見えていないものに気づかされることが多くありました。これから自分の勉強にたいへん参考になっていくだろうと思います。ありがとうございました。

数多くの仏像を見て、さまざまなつながりや意味、シンボルなどを持っていることが、この授業を通して少しあはかりました。まだまだわからないことだけですが、仏教に対する興味が、今までよりずっと強くなないので、これからも機会があれば、仏教にふれていきたいと思いました。

今日の講義で先生がおっしゃっていたように、今までなぜ仏教の像や絵はハスの花がいつも描いてあるんだろうと思っていたが、この宗教学Bの授業で、蓮の花の持つイメージを知り、蓮の花があることの作品における意味がわかるようになり、作品への思いが変わった。日本人である以上??、仏像と関わる場面は多くある以上、この授業でさまざまなことを知れて良かったと思った。

「意味がわかると違って見える」という言葉に、はっとさせられました。今日の5枚目のヤクシャのスライドを見たとき、踏みつけているようにしか見えなかつた像が、「支えられている」という説明で、一気にそのような見方に変わりました。ちょうど、トリックアートで、二通りの見え方に気づいたときと同じ感覚でした。ひとつのものでも、二つ（あるいはそれ以上）の見方に気づけると、何か得した気分がします。世の中にあるものは、すべて本来はそういう仕組みになっているけど、今の自分はまだひとつしか気づいていないのかもしれない、という気がします。もっといろんなものを見て、考えて、意味に気づいていくことで、自分の世界を広げられたらしいと思いました。

意味を理解した後では、同じものが違って見えるという言葉にはっとしました。たしかに日常生活でも、そういった経験が少なからずありました。要はどう解釈するかなのだと思います。

今までの全部まとめると、曼荼羅についてが一番興味がわいた。

はじめの方の授業は、何を言っているのかさっぱりわからなかったけど、後半の授業でだんだん内容を理解できるようになったと思う。教科書を読んで、見覚えのある神の名前とかが出てきて、神々の相関図がけっこう理解できた。もう一度、はじめの方の授業のプリントを読み直せば、もっと理解できるようになると思う。

仏像といった「実体」とイメージといった「空想」。対極に位置する二つの性質を根幹に、密教、宗教は成り立っているのだろうと私は考えました。

密教美術はその宗教の象徴であるからして、その団体によって所有、管理されることを、真の価値を發揮するのだと思う。

それなりにおもしろかった。あと、マイクの電池がたびたび切れてしまう先生のユーモアさには感動でした。

私はずっと「仏教」は仏教の中、「ヒンドゥー教」はヒンドゥー教の中でといったように、閉じられた世界を想像していました。だから、この講義の最後の方で、「ヒンドゥー教の神々」がたくさん登場するのには、考えもしませんでした。本当にインドは不思議で魅力的な国だと思いました。

＜今日の先生のコメント＞宗教は人間の中に存在するんですね。人間とともにあって、人間とともに終わるから、人は生きている間中「人間とは何か（＝宗教）」というものと向き合わねば行けないんだなあ。難しい質問だといました。

＜授業を終えての感想＞最初はまったく意味がわからなくて、さすが密教だと思いました。だけど、話を聞いていくうちに、全体のアウトラインがぼんやりと見えてきた気がします。なかでもマンダラの話はちょっとおもしろかったです。しかし、ダライラマが仲間はずれにされているという事実には、悲しさを感じました。前期間、ありがとうございました。

授業で取り上げられるテーマが壮大だったり、説明の内容に専門的な言葉が多かったりで、わからない部分がいっぱいあったけれども、わかった部分も少しあったし、将来に役立つようなことも学べた（と思う）ので、よかった。

仏教とヒンドゥー教が意外なところで関わることを知った。宗教って、それぞれが独立していると思っていたので驚きました。

もともと仏教に興味があったのでこの授業をとりました。正直、最初は日本の仏教の中でのさまざまな宗教について興味があり、それについての内容を期待していました。自分のイメージしていた授業とは違ったのですが、自分の中でまた新たな興味、関心が生まれたと思います。とくに、仏像がおもしろくもう少

いろいろなを見てみたいと思いました。ありがとうございました。

こんなにたくさんの仏像を見る機会というのは、なかなかないのではないかと思うので、この授業を通して、個性豊かで魅力的な仏像に出会えてよかったです。仏の世界に関する興味深い知識を得ることができたと思いますが、まだ理解し切れていない部分も多く、全体的な流れ（？）のようなものもよくわかっていないので、次回のテストまでに、今までのことを復習して理解したいです。

この授業は非常に興味深かったです。仏教、密教などを勉強する対象としたのは、当然、今回が初めてでした。多くの仏について、その成り立ちから行く末までを見通して、そこに付加されていく意味や失われていく性質、形など、さまざまな視点で「密教」というものを見ることができたのがよかったです。とくに、宇宙論や世界と「私」などを扱うあたりからがわくわくしたように思います。複雑すぎて、やっぱり理解のできない部分がありましたが、どこかで、それまでの授業内容がパズルのようにはまっていく様子に、ある種の美しさすら感じました。あと、最後の授業の問題提起で終わるところもいいと思います。

宗教において、「形」と「意味」の間の解釈と再認識は、宗教への理解をさらに深めるものとして、効果的だと思いました。また、このような曖昧なイメージを解釈、再認識の行為を行うことで、個人の中にはっきりしたイメージを作り出していく宗教画は、おもしろいと思います。

自分が授業の中で「再認識」できたか、というと、できなかつたものの方が多い気がする。解釈の段階で止まっている。曼荼羅の見方はわかったが、仏の世界観は変わっていない。しかし、結局はそういうものだろうなどとも思う。世界観など、さまざま当然だ。しかし、そのさまざまなものうちのひとつを知ったことで、何かしらの自分のかてになったのだろう。

最初の降三世明王のスライドは、完全に足の下の尊格を制圧しており、毘沙門天などは、下の尊格に支えてもらっているということだが、ぱっと見て二つに違いはあるまいと思う。そのため、意味によるイメージの認識が、差異を生み出すのに重要なだろう。まったく同じ形（イメージ）でも、新しい意味、解釈の可能性が与えられると、また違った視点でとらえることができる。そのため、同じスライドを、生をまたがって何回も紹介したのではないかとも思いました。宗教学は「何が宗教美術を生み出したか」を考えると、背景には歴史、文化、地域など、人間に関わる多くのことが見えてくる。つまり「宗教学」とは、人間の生活を知ること、ひいては人間とは何か、といった、深い文化面へのアプローチを試みる学問だと知った。自分は経済学部なので、直接的に関わりのある科目とは言えないかもしれません、毎講義とてもおもしろかったです。3ヶ月間ありがとうございました。

「聖」この言葉ほど、今の僕や時代にないものはないと思います。「聖」の反対が「俗」ならば、それは日常だし、変わらないことだし、もっといえば、人間？「聖」を考えるって、しんどいんですよね。それは特別だし、変わることだし、時には自己犠牲を強いるから。でも、それを通過しなきゃ「人間の奥底」にはたどり着けないと思う。これから僕たち、これからの日本の問題って、今までハレ物扱いしてきた「聖」なるものに、決着をつけることだと思います。

インドでは踏むことが征服ではなく、踏まれる者が上に乗る者を支え、出自をあらわすのだと分かり、すっきりしました。単に征服されていることを表すより、この方が「意味を持つ像」という感じがします。

最後にヒンドゥー教の神々の作品を見て、仏教の仏たちとの相違を知られ、インドの思想、宇宙観など、多岐にわたる長い間、人々が生み出してきた考え方を振り返ることができました。

関係なさそうなものが、授業が進むにつれつながっていく過程が、とても聞いてて楽しかったです。今までの授業で一番好きなのは地獄めぐりでした。あの辺をもう少しやりたかったなあ・・・。仏教の世界には、仏だけでなく、いろんな者が関わっていて、最後にはとても大きなものになっていたことに驚きました。ちょっと世界を見聞した気分です。仏像めぐりをしたくなりました。

今までの講義を振り返って思ったのは、月並みだけれど、奥が深いなあ、密教美術の世界は広いなあということです。一番だめな感想ですね。あえていうと、私は仏の世界像に興味を持った。同体だとか、イメージだとかがとてもおもしろい。支えている者、イメージの源流とかそういうところも、自主的にもっと調べてみたいと思った。長い年月をかけて、多くの人たちが、このような世界観を作り出したことになんか感動してしまいました。学んでいけば、私も悟れるのでしょうか・・・？（笑）

イメージの意味がわかると、同じものでも違って見えるというのは、納得しました。私は理由もなく、仏像が好きだったんですが、さらに興味を持つようになりました。

今までの授業を通しての印象も、教科書を読んでの印象にも、循環というものがあった。「学問に終わりがない」という言葉は、先週の人外学科の行動科学序論の発表で、○○コースの先輩も使っていました。「終わり」の話が出てくると、気になり出すのは「始まり」ですよね。学問の始まりもそうだけど、宗教や信仰の始まりっていうのも、どこなんだろうと思います。そもそもあるんでしょうかね。

授業の内容としておもしろいと思ったことは、仏教は独立しているわけではなく、ヒンドゥー教との関わりやアスラもあわせて、はじめて仏教の世界観がわかるという点でした。私は第3章が好きでしたが、こういったつながりがある点でおもしろかったです。シヴァやウマーは降三世明王に制圧されていないと好き勝手しそう（破壊神だし・・・）なので、多少そういった関係のある方が、パワーバランスが保たれているのではないかと思いました。

この講義を通して、密教（仏教）美術や、仏教全体に興味を持つことができました。インドの神々や仏様には、いろいろなつながりがあり、もっと仏教に関する伝説や神話を知りたくなりました。

ヒンドゥー教の神は仏教の神と深いつながりがあることがわかった。前回のスライドにあったシヴァを踏んでいるカーリーの像は、シヴァがカーリーを支えているということなんだろうか。降三世明王が大自在天を踏まなければならなかった理由は、何だろうか。大自在天たちが降三世明王におびえている様子を表すだけではだめだったのか・・・。というようなことが気になりました。自分で答えが出せなくてすみません。

最初はただ仏像を見るだけだと思ってたけど、回が進むごとに考えさせられることが多かった。とくに宇宙の回は感動しました。京都、奈良に行ったときは仏像めぐりに行ってきます。

今日で授業終わりましたね。お疲れ様でした。もともと、ルネッサンスなど、昔の絵画を見ることが好き

だったので、たくさんの絵が見れて、得した気分です。あと、私の授業とまったく関係ない質問にも、あんなに丁寧に答えてくださって、ありがとうございました。

今日までこの講義を受けて、先生はこのスライドを全部自分で写真を撮りに行ってるのかなあ・・・と思いました。そうだったらすごいですね。仏像やインドについて、あまり知識がないので、難しいなあと感じる部分もありましたが、最初の講義の時とは、見方が変わってきてるので、よかったです。

前に課題として教科書をまとめたとき、あまり理解できずにむりやりまとめた感があったが、今までの話を総合的に考えてみると、何となくわかった気がする。とくにイメージと意味の関連（シンボルやモチーフの共通など）については、ちょっと深く認識できた気がする。

まず、今日の授業で、教科書の第7章の話が出てきてうれしかったです。足の下に置かれても、敵対しているわけではなく、上の者を支えているという考えがとても気に入っています。私は、仏像自体に今まで興味がなかったけど、そこにこめられている意味などを知ったときが、一番楽しいと思えました。

最初、この授業を聞き始めたときに、疑問が浮かぶことが多くて（最後の方も多々ありました）、でも、日本やインドなどの仏像やマンダラについて、少し（全部とは言えないで・・）理解することができたのでよかったです。自分=宇宙の考え方には、自分を大きくした気がします。京都、奈良へ行きたいです。

講義の終わりにあたって

試験ごくろうさまでした。評価はこれまでに提出してもらったレポートや出席などをあわせて、総合的に行うので、それほど心配なく。

*

さて、毎回、授業への質問や感想を書いてもらいましたが、最終回の前回の出席カードには、「学問の世界の広さを知った」「ものごとを見る視点がいろいろ可能であることがわかった」「これまで興味がなかったが、関心を持てるようになった」などのコメントがいくつもあって、よかったです。また、「終わるのが名残惜しい」「感動した」「驚いた」という感想も、授業に対するダイレクトな評価でうれしいです。もちろん、その一方で、「難しい話だった」「よくわからなかった」というコメントもけっして少數ではありませんでしたが、「それでも、けっこう楽しめた」「少しは理解できた」という「なぐさめ」(?)もついているがありました。授業の理解度は、それまでの基礎知識や、該当分野への関心の度合いでそれぞれ異なりますから、各自が自分なりに何か得るものがあれば、私はそれでいいと思っています。

この授業のテーマは「密教美術の世界」でした。授業で紹介してきた作品は、ほとんどの出席者の方が、はじめて見るものだったと思いますが、半期の授業を通して、いくらか親しみが感じられるようになったのではないかでしょうか。この授業ではインドの密教美術を、具体的なイメージを通して知ることを目指していましたので、それなりの効果があったと思っています。また、インドとの比較として日本の密教美術もできるだけ紹介してきました。インドの密教美術に結びつくような作品が、身近なところにあることに驚いた方も多いかったのではないでしょうか。

前回の最後にお話ししたように、この分野では「より深く見ることの難しさ」と「イメージを追うことのおもしろさ」があります。知識が増えるにしたがって、同じように見ていながら、それまで見えなかつたものが見えてくるということが実感されるはずです。作品は現に存在するのですから、それを見ているという行為は同じなのですが、背景となる知識にしたがって、見えるものが違ってくるのです。作品が変わるものではなく、私たちが変わるのであります（そのようなコメントしてくれた方もいました）。

マンダラを中心まとめたところで、いろいろなトピックがつながりを持つことに気がついたという感想もありましたが、これも私の意図したところです。大学入学前の勉強では、問題と解答が一対一で対応しているのがあたりまえだったと思いますが、学問というのはそれほど単純なものではありません。問題設定や視点を変えることで、いくらでも答えを出すことが可能です。どの答えで満足するかは、問題を見つけるわれわれ自身が決めることなのです。

この授業の科目名は「宗教学」で、副題も「仏教学」でしたが、はじめにお断りしたように、宗教学入門や仏教学概説という内容ではなく、密教美術といいしさか特殊なテーマで講義をしました。これは私の専門分野もあるのですが、教科書的な概論よりも、専門性の高いテーマから、学問の魅力を知っていただきたかったからです。まとめ示した大きな問題、たとえば「聖なるもののイメージ」とか「世界とは何か」というものは、そのような意図から出されたものです。これらの問題は、美術の分野よりも、宗教や思想、哲学など、人間の存在そのものを扱う学問にかかわります。そして、そのことを自覚してもら

えるように、いくつかの問題を提起しました。たとえば、対象をありのままに表現するとはどういうことか、対象に最もふさわしい表現方法は何か、さらには、世界とはどのようなイメージでとらえられるか、「私」とは何か、私と世界はどのような関係にあるのか、生命とは何かなどです。

*

授業では出席の確認もかねて、質問や感想を出してもらいました。自分や他の人の感想などを読んだり、それへのコメントを読むのを楽しみにしていた方も多いかったようです。とくに、自分の質問が載るとうれしいという感想を、複数の人から聞きました。毎年のことですが、全般的に質問の内容も回をおうごとにレベルが上がっていきました。大学の授業でも教養教育の講義は、ほとんど一方通行で終わってしまうのですが、これによっていくらかは双方向のコミュニケーションができたと思っています。書いてもらった質問や感想をできるだけ紹介したかったのですが、10人程度が限界でした（それでも2時間は費やします）。出席者数がだいたい110人前後だったので、倍率はおよそ11倍となり、紹介できなかつたものも多かったのですが、かならずすべて読んで、できるだけ授業に反映させるようにしていましたので、ご了承ください。

「密教美術の世界は奥が深い」という感想はできるだけ避けてくださいとはじめにお願いしましたが、もちろん「密教美術の世界は奥が深い」です。そして、学問というのはすべて「奥が深い」ものです。「底が浅い」ような学問は、まだ掘り下げ方が不十分なのです。むしろ、どのような点について「奥が深い」のか、どことどこがつながることによって、「奥が深い」と感じるのかを、さらに考えてほしいと思います。実際、この授業は教養の授業なので、それほど立ち入った議論や、いろいろな考え方を紹介しませんでした。これらについては、学部や大学院の授業で取り上げています。私の所属学部である文学部や、他の文系学部の皆さんには授業などを通じて、またお話しする機会もあるでしょう（文学部はもちろん、法経も卒業単位になりますし、教育学部向けに開講している授業もあります）。それ以外の学部の人も、本や出版物などで、これからも接する機会があればと願っています。ついでに、この場を借りて宣伝をしておくと、7月上旬に『生と死からはじめるマンダラ入門』（法藏館）という本を出版しました。授業でとりあげたテーマを、さらに「深く」掘り下げたい人には、ぜひ読んでいただきたいです。

共通教育の私の授業は、この宗教学Bだけですが、同じような分野として、後期月曜2限の「インド思想史」（大熊玄先生）を推薦しておきます。私が2回ほどあつかった「世界と自己」のようなテーマを、さらにくわしく講義されます。評判の高い授業なので、このあたりに関心を持った方はぜひ取ってみてください。

インドや仏教美術などについて知りたいことがあれば、メールなどの質問も歓迎します。また、私のホームページでも、インドを中心とした宗教図像の写真を、随時、拡充して行くつもりです。ときどきのぞいてみて下さい。

*

前回のコメントは、原則として全員分を掲載しました（掲載不可に印を付けたものは除いてあります）。そのため、私の回答は省略しました（それでも11頁！あります）。